

Web公開版

2019（令和元）年度

2回生進級時アンケート報告書

京 都 大 学 国 際 高 等 教 育 院

目 次

1	調査の概要と目的	1
2	回答者の属性と回答率	2
3	志望意識と専門分野	4
4	学習意欲	8
5	大学教育での向上感	13
6	ILAS セミナー・実習・実験科目の受講	19
7	履修動向と成績	26
8	成績評価への納得度	31
9	学生生活	34
10	学生の期待	41
11	教養・共通教育についての意見	43
12	まとめ	49
	【資料】 2019 年度 2 回生進級時アンケート	52

1. 調査の概要と目的

2回生進級時アンケートは、2003年度入学者を対象として2004年4月に初めて実施されて以来、長年に亘って学生の学習活動についての意識変化を追跡してきた。初期においては紙を媒体とした調査を行っていたが、2007年度からは京都大学で整備された教務情報システム（KULASIS）による回答方法を採用している。毎年の調査結果は国際高等教育院のホームページに掲載し、学内外に公表されている（URL：<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/introduction/inspection>）。

本調査の第一の目的は、学生が入学後1年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に「教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか」について2回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実するための基礎資料にすることである。

本調査の第二の目的は、京都大学の教育活動に対する検証である。大学機関別認証評価 大学評価基準（第3期）では、基準6-4、6-6、6-8 のそれぞれにおいて、「適切な授業形態、学習指導法が採用されていること」「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていること」「適切な学習成果が得られていること」が謳われており、これを受けて京都大学の第三期中期計画 計画番号9 において、「授業評価アンケートや、卒業生・修了生、就職先等関係者へのアンケート等の実施により学生等の意見を聴取し、教育改善に活用する」としている。このためには、入学時から卒業時に至るいくつかの定点で、学生意識の変化を調査することが必要であり、本アンケートはそのような検証の一環として有用な質問を設けている。また2018年度より、卒業生進路調査アンケートとの連携が図られ、卒業時に尋ねた教養・共通教育に対する学生意識の結果を適時参照できるようになった。

調査対象： 学部新2回生（2018年度入学生）全員

実施期間： 2019/04/01 ～ 2019/06/05

調査方法： KULASIS上でのアンケート回答方式をとっている。上記の調査期間に各学部新2回生が履修登録確認のためKULASIS にログインした際にアンケートへの協力願いを掲示し、回答フォームに入力するという方式を採用した。アンケート全文は末尾に添付している。

注1) 本報告書において文系理系の区分をする場合、集計の都合上、総合人間学部は文系に含めた。

注2) 各設問において、回答が空白の場合は回答数より除いた。

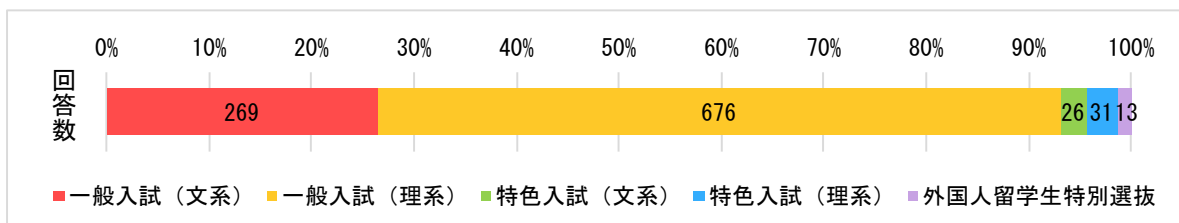
2. 回答者の属性と回答率

最初に回答者の属性に関する質問をし、アンケート全体での区分解析を可能にした。特に一昨年度から、学部別に加えて、一般入試入学者（文系・理系）、特色入試入学者（文系・理系）、留学生の区分を設け、必要に応じて解析区分として採用した。

Q.01 あなたが京都大学に入学した入試区分は次のどちらですか。

- ①一般入試（文系） ②一般入試（理系） ③特色入試（文系） ④特色入試（理系）
⑤外国人留学生特別選抜

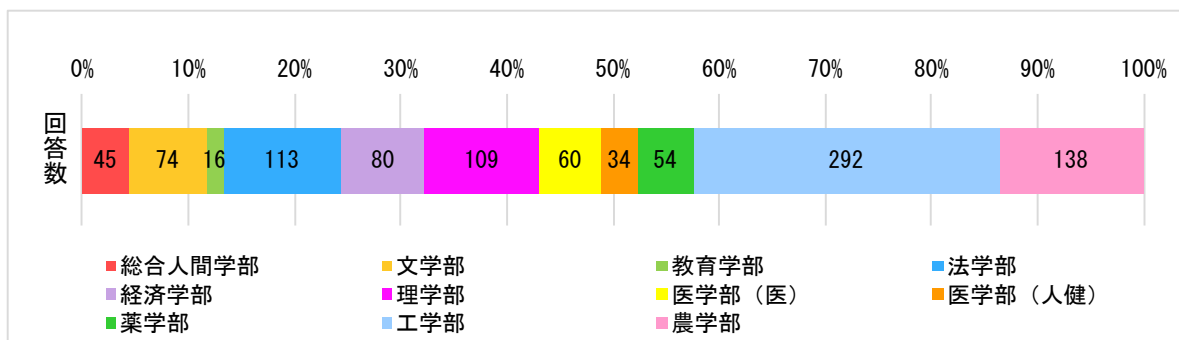
< 図 1 >



Q.02 あなたの学部を教えてください。

- ①総合人間学部 ②文学部 ③教育学部 ④法学部 ⑤経済学部 ⑥理学部 ⑦医学部（医学科）
⑧医学部（人間健康科学科） ⑨薬学部 ⑩工学部 ⑪農学部

< 図 2 >



<表1 学部別アンケート回答者数・回答率>

学部	計	回答者数	回答率	文理
総合人間学部	129	45	34.88%	32.70%
文学部	226	74	32.74%	
教育学部	62	16	25.81%	
法学部	335	113	33.73%	
経済学部	251	80	31.87%	
理学部	314	109	34.71%	35.95%
医学部	215	94	43.72%	
薬学部	87	54	62.07%	
工学部	982	292	29.74%	
農学部	313	138	44.09%	
合計	2,914	1,015	34.83%	

(2019/5/1 現在)

学部別のアンケート回答者数ならびに回答率を表1に示す。各学部に2回生ガイダンス等でアンケート調査にご協力をお願いし、またKULASISにて再々回答を促した結果、本年度の回収率は34.8%(1,015名)となり、昨年度の31.8%より3ポイント程度向上した。ただし、なお学年在籍者3人に1人の回答に基づいた解析ではデータの信頼性という観点、さらには教育改善への取組という意味においても大いに問題であり、来年度以降も継続して改善策を講じる必要がある。

<表2 学部別アンケート回答率の変遷>

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	(*)平均回答率
総人	30.1%	30.6%	36.7%	57.8%	59.2%	48.0%	54.5%	37.7%	22.5%	34.7%	20.0%	31.2%	15.7%	28.2%	34.9%	26.3
文学	26.9%	25.6%	28.6%	50.5%	50.2%	49.8%	49.8%	41.3%	23.7%	30.4%	29.8%	28.9%	29.6%	37.9%	32.7%	33.4
教育	34.9%	29.2%	35.5%	37.7%	37.7%	44.3%	42.6%	32.8%	23.3%	26.2%	22.6%	17.7%	28.1%	29.5%	25.8%	27.8
法学	19.3%	16.8%	30.4%	44.1%	44.4%	42.6%	42.4%	30.2%	17.8%	31.7%	25.9%	18.8%	19.2%	25.0%	33.7%	26.0
経済	14.8%	12.9%	25.4%	37.3%	36.3%	37.5%	42.3%	44.8%	21.3%	31.0%	24.6%	19.8%	14.2%	20.9%	31.9%	22.3
理学	30.1%	29.9%	38.1%	49.4%	50.2%	58.0%	53.3%	45.9%	29.9%	35.2%	33.2%	28.8%	29.2%	35.6%	34.7%	33.1
医学	39.7%	25.7%	20.1%	33.3%	37.2%	34.6%	35.3%	32.7%	15.9%	26.4%	22.1%	21.3%	16.9%	22.3%	43.7%	27.7
薬学	25.8%	19.1%	35.6%	55.2%	57.8%	51.8%	52.3%	56.0%	30.5%	50.6%	34.5%	39.3%	32.2%	82.6%	62.1%	58.9
工学	74.7%	33.7%	35.5%	45.6%	45.2%	44.5%	50.3%	41.5%	23.2%	36.6%	23.4%	25.4%	20.8%	31.6%	29.7%	27.4
農学	19.5%	23.8%	34.1%	45.2%	46.1%	46.7%	50.2%	39.6%	26.6%	34.2%	32.8%	23.4%	19.5%	35.5%	44.1%	33.0
全体	41.8%	26.5%	32.2%	44.9%	45.5%	45.2%	47.7%	40.1%	23.1%	33.9%	26.4%	24.7%	21.4%	31.9%	34.8%	29.4

(*1)2017年~2019年の3年間の平均提出率

(*2)黄色は回答率上位2学部、青は回答率下位2学部

表2には、2005年度(平成17年度)以降の学部別アンケート回答率の変遷を示した。最近3年間の平均回答率を見ると、30%を超える高い学部(文学、理学、薬学)から、25%程度の低い学部(総人、法学、経済)まで大きな差があり、全体、文系、理系として集計するときは、回答率の差による影響を受けることに留意されたい。昨年より各学部の協力もあり回答率が大きく改善した。特に今年も、薬学部の回答率が60%を超えている。薬学部で新学期に実施された2回生ガイダンスで積極的に回答を促していただいた結果であり、今後の改善策を考える上で大いに参考になる。

3. 志望意識と専門分野

大学はホームページやパンフレット、オープンキャンパス等のさまざまな方法により、各学部の学術分野、教育内容、学生生活等を広報し、入学者に期待する資質をアドミッションポリシーとして公開している。入学試験という関門を通過して京都大学の各学部に入学者は自らが志望する分野を選択しているはずであるが、将来の活躍分野をどこまで具体的に意識しているか、またそれが学習の動機付けに結びついているか、は入学後の教育効果を大きく左右するものと思われる。つまり、

志望 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習効果 → 向上感（満足度）

の正の連鎖を期待する。一方、その志望意識とこれから学ぶことになる専門分野との一致度が良くない場合は、負の連鎖を起こす恐れがある。アンケートの初めにこの重要点について Q.03～Q.06 で把握し、以後の学習行動や学習効果との相関を考察した。

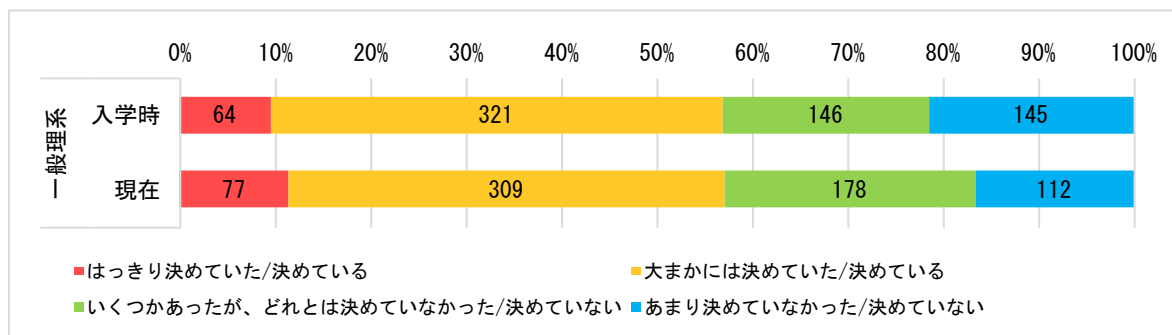
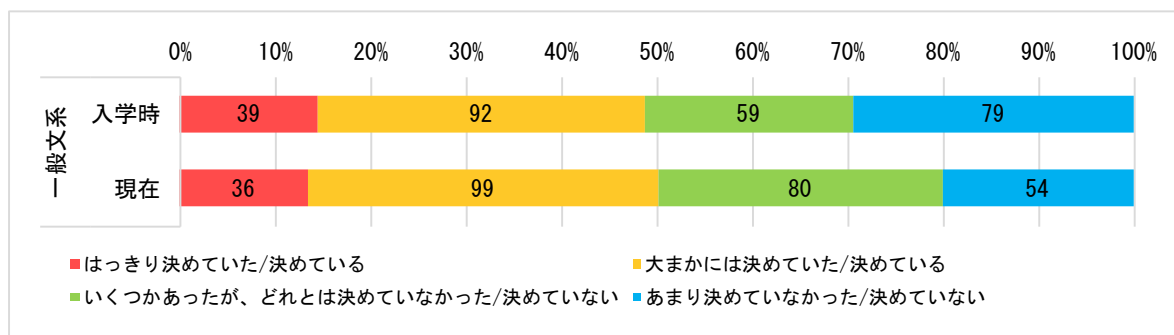
Q.03 あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていましたか。

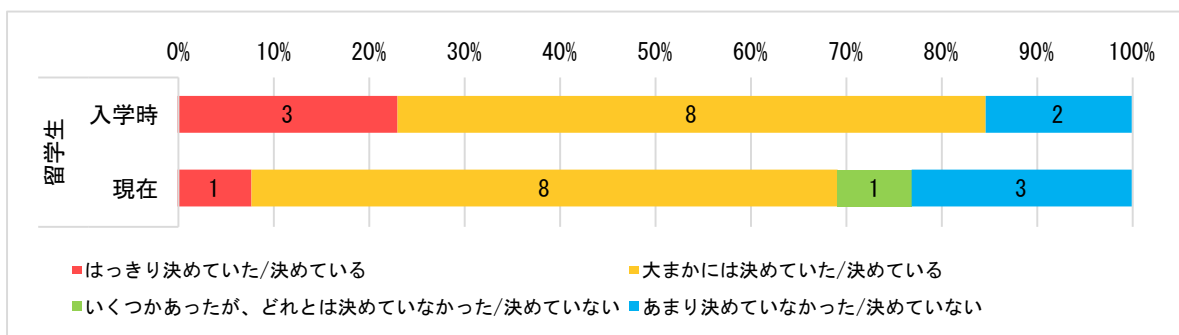
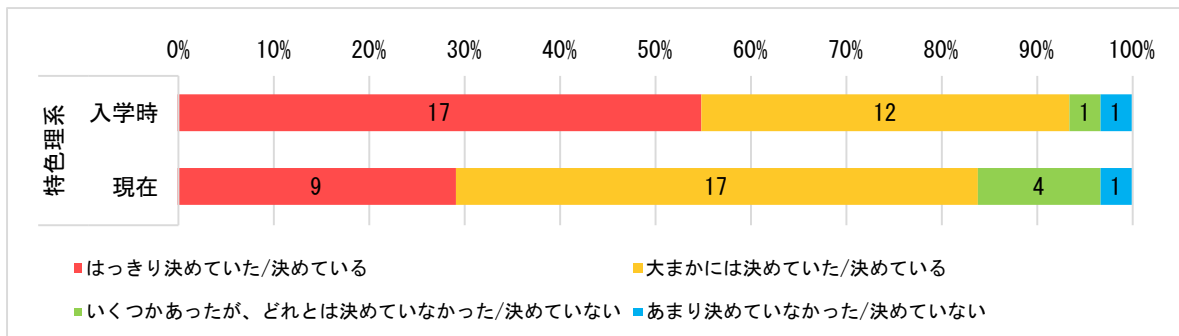
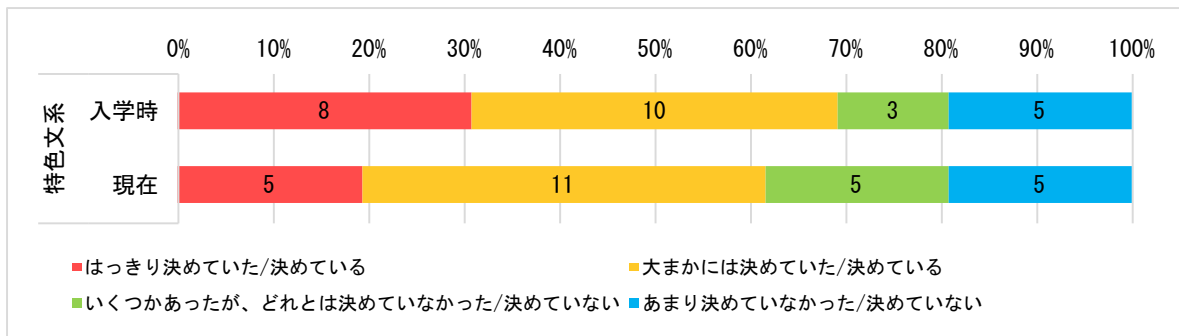
- ①はっきり決めていた ②大まかには決めていた ③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
④あまり決めていなかった

Q.04 今現在、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていますか。

- ①はっきり決めている ②大まかには決めている ③いくつかあるが、どれとは決めていない
④あまり決めていない

<図3 志望意識・入試区分別>





Q.03 と Q.04 は入学時と1年後の現在で、志望意識を尋ねた質問である。平均として、文系、理系とも10～15%の「はっきり決めている」を含む約50～60%の学生が将来活躍したい分野を「(大まかには)決めている」。また、約20%は現在でも「あまり決めていない」と答えている。専門分野の中で具体的な活躍分野がイメージできていないということかも知れないが、専門分野そのものに志望意識をもてない場合は、今後の勉学のモチベーションを保てるかという不安が残る。この点はQ.06で確かめることになる。

Q.03 と Q.04 を比較すると、全体として例年、1年後の現在の方が「はっきり決めている」と「大まかには決めている」の回答合計が増加するのが普通であるが、今年の場合、増加はするもののその数値を昨年と比較すると、一般文系(60%→50%)、一般理系(61%→57%)と減少していることは残念な傾向である。一方、「決めていない」が(文系:29→20%、理系:21→17%)と減少しており、入学後に次第に志望意識が明確になるという好ましい傾向を示している。

一般入試と特色入試の入学者を比較すると、特色入試制度の趣旨を反映して「(大まかには)決めている」の比率が特色入試区分では各段に大きくなる傾向にある。しかし今年は、特色入試、特に文系で「(大まかには)決めている」の比率が入学1年後に大きく減少して、一般入試のレベルに近づいている。特色

入試の区分では回答数が少なく、統計的に有意な結果とは言い難い面もあるが、特色入試が開始されて数年が経過し、その意義が薄れてきていることを示唆していると考え、注意を要する結果と言える。特色入試理系ではその傾向は見られない。同じく留学生の区分のデータも回答数が少ないので明白ではないが、入学時より現在の方が、志望意識が揺らいでいるという傾向が示唆されていることも気がかりである。

Q.05 入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。

- ①変わっていない ②変わった

<図4 希望分野の変化・入試区分別>

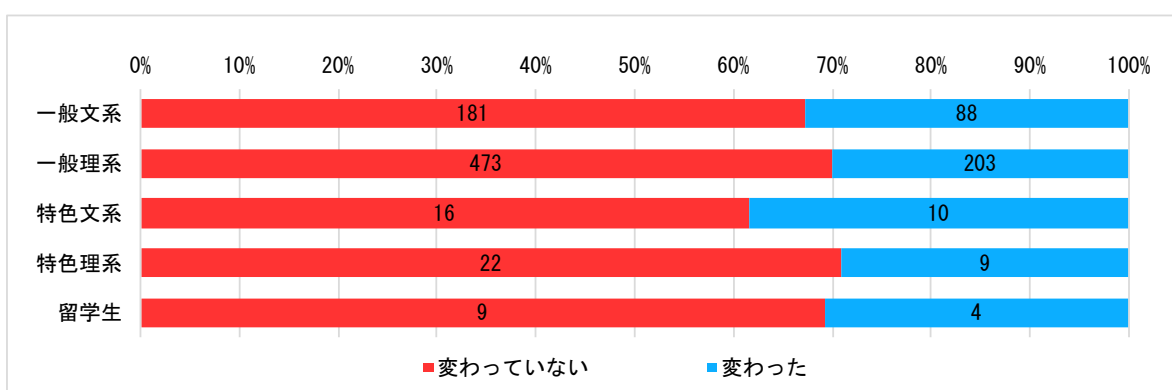
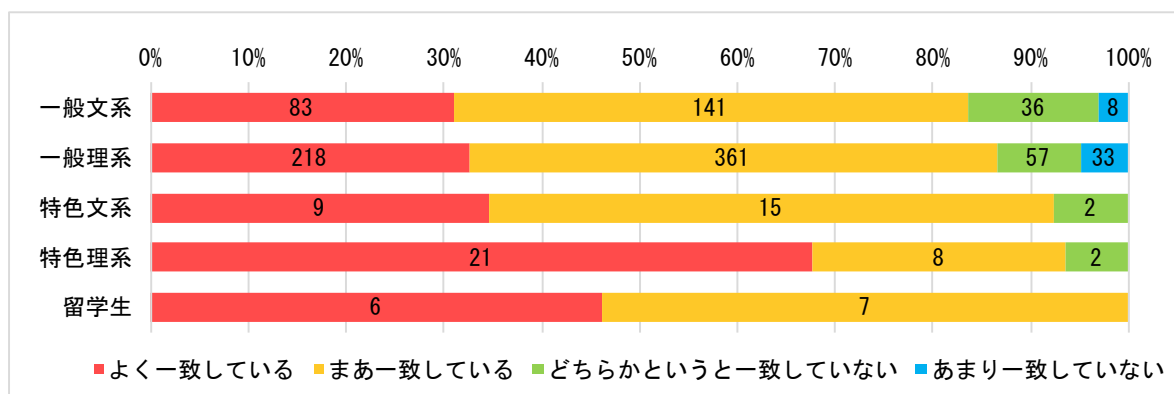


図4には入試区分別の結果を示したが、文系と比較して理系学生では若干ではあるが志望変化が少ないことが分かる。留学生区分での「変わった」と答えた学生の比率は、昨年までは大きかったが、今年は他の区分と同様であった。

Q.06 現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。

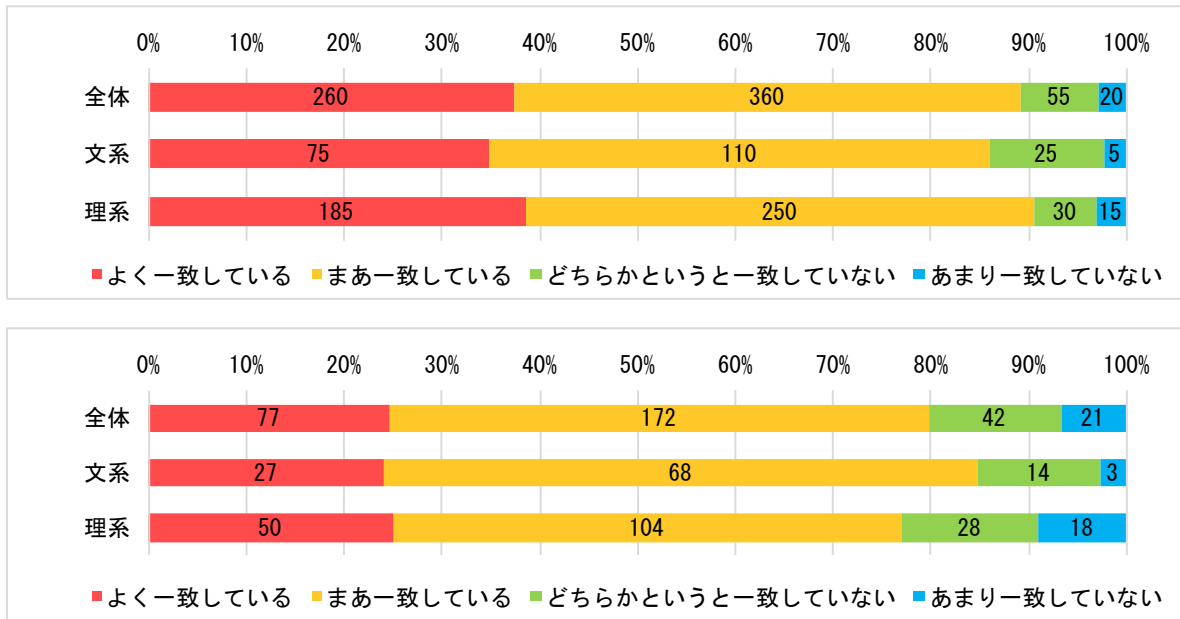
- ①よく一致している ②まあ一致している ③どちらかという一致していない ④あまり一致していない

<図5 希望分野と専門分野の一致度・入試区分別>



1年間の学習経験と大学生活を経て、自らの希望分野とこれから学ぼうとする専門分野との一致度について学生がどのように思っているか、を尋ねた。この段階で「どちらかという一致していない」、「あまり一致していない」は好ましくない回答である。一般入試の文系・理系ともその比率は20%以下にとどまり、大半の学生が「よく一致している」、「まあ一致している」と回答していることは良い結果といえる。

<図6 上：希望分野が「変わっていない」と回答した学生、下：「変わった」と回答した学生>



次に、Q.05 で希望分野が「変わっていない」と「変わった」と答えた学生の区分について一致度の解析を行った。

「変わっていない」と答えた学生の専門一致度は高く、90%に達している。一方、「変わった」と答えた学生の区分でも「(まあ)一致している」の回答が文系、理系とも約80%であることから、より一致度が良くなる方向に学生の意識が変化していることを示している。ただし、希望分野が変わっていないと答えた学生の約10%、変わったと答えた学生の約20%が(どちらかというと・あまり)一致していないとしている点は気掛かりな点である。

4. 学習意欲

Q.07 入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の5つから選択してください。なお、この質問は Q.7～Q.11（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）まであります。

<入学当初の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.08<前期半ばの時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.09<後期開始の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

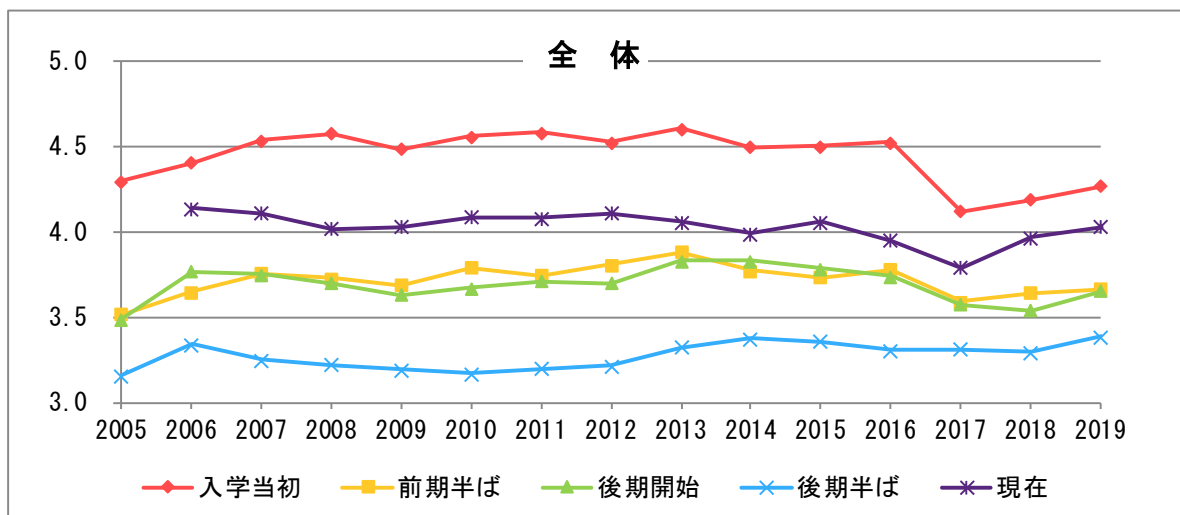
Q.10<後期半ばの時期>

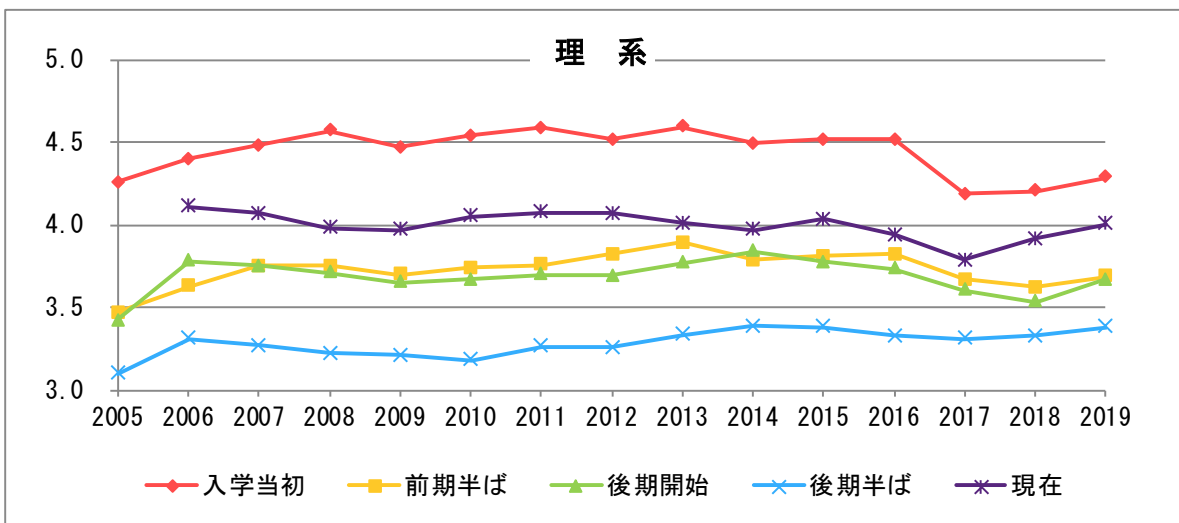
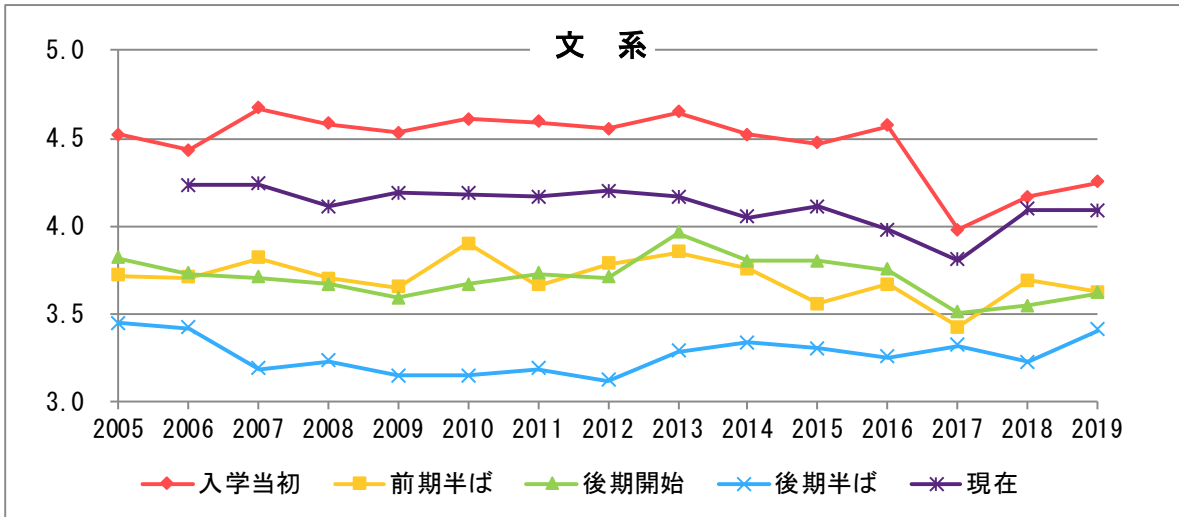
- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11<現在>

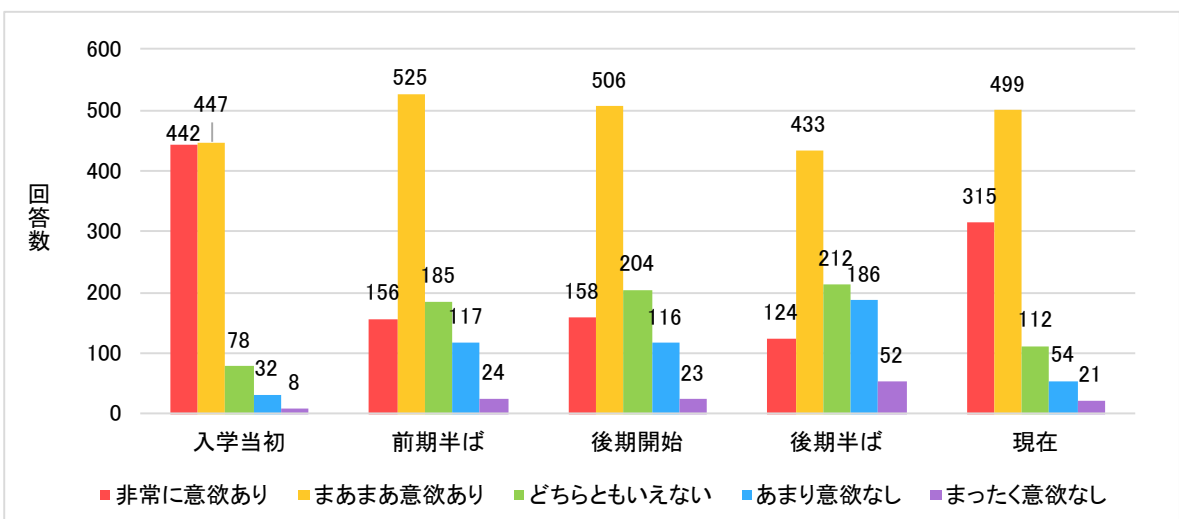
- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

<図7 学習意欲の経年変化（2005-2019年）>





< 図 8 学習意欲の変化 回答分布 (2019年：全体) >



学習意欲については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。経年変化を見るために、学習意欲を数値化してその平均点を各時期（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）

についてプロットした。

数値化については、「①非常に意欲あり」を5とし、最後の「⑤まったく意欲なし」を1とした。

図7に示したように、入学当初の高い学習意欲から、次第に低下して後期半ばで底になり、2回生新学期で回復するという傾向は長年同じである。また、文系、理系で見てもその数値に大きな変化はない。図8においても、赤の「非常に意欲あり」が前期半ばで激減するのは致し方ないとしても、青の「あまり意欲なし」が時間を追って着実に増加するのは嘆かわしい傾向である。今回の調査で観察された良い結果は、2回生進学時（現在）の意欲回復が、昨年に引き続き見られることである。特に文系にその傾向が著しく、ほぼ入学当初の値まで回復している。また、2017年度調査で、入学当初の意欲値が以前より大きく低下していた理由は、それまでは学生が回答するに当たり自身が入学時に記入した抱負や期待を読む欄を設けていたので、回想効果があったが、2017年度よりこれを廃止したためと思われる。

<図9 学習意欲の変化・全体比率 上：2018年度、下2019年度>

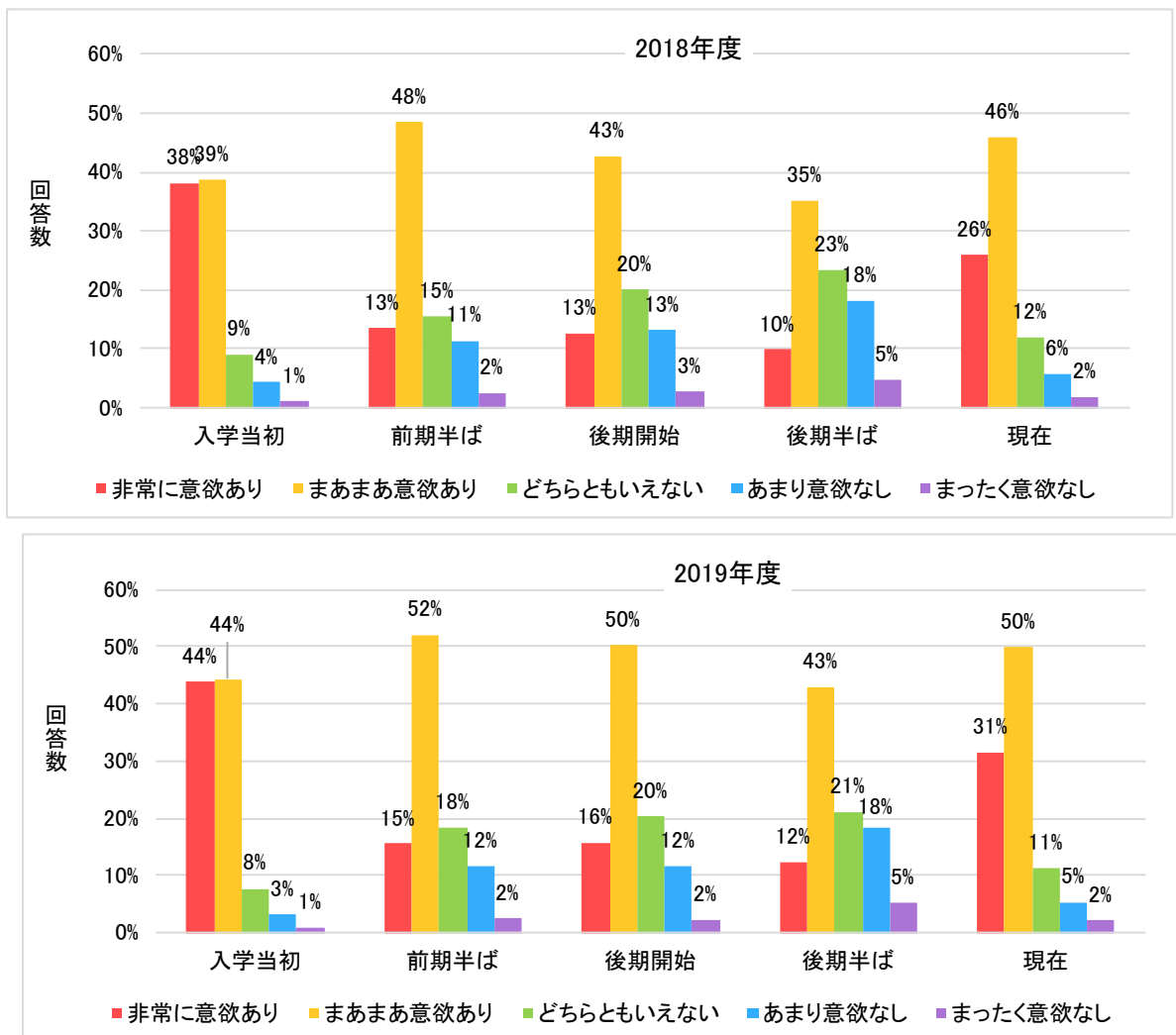
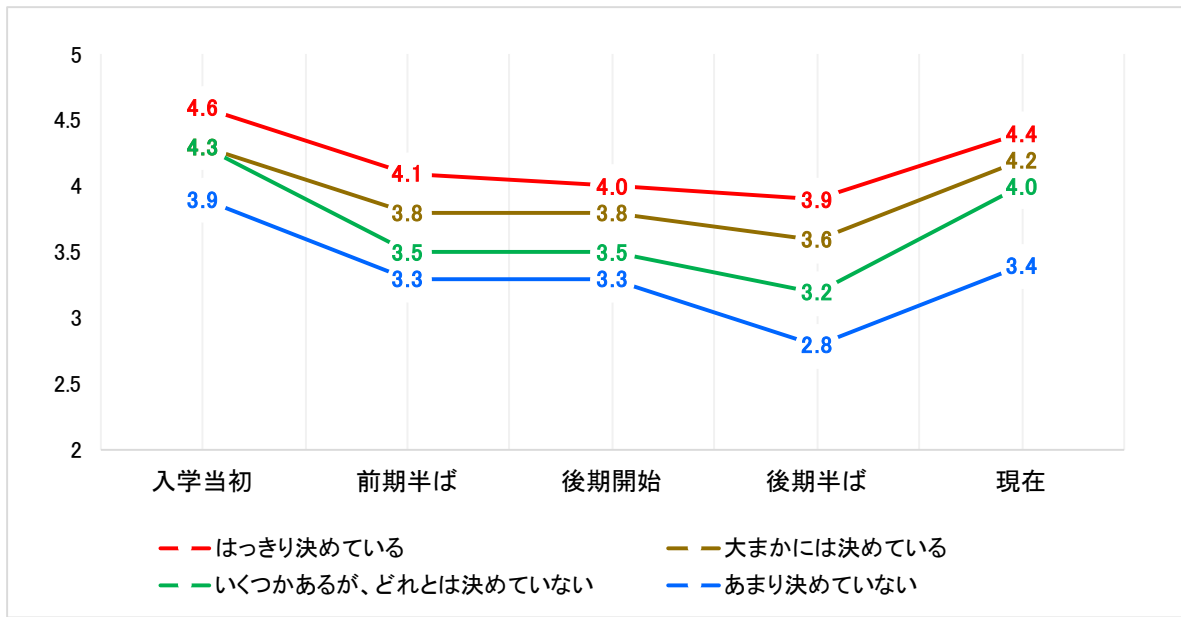


図9は昨年の意欲分布と今年の分布を比較して表示している。全体的には、入学当初の高い学習意欲が次第に低下して後期半ばで底になり、2回生新学期で回復するという傾向を、毎年見事に再現している。1回生での意欲低下をいかに防ぎ、2回生につなぐことができるかが引き続き大きな課題である。

< 図 1 0 学習意欲の変化 志望別 >



< 図 1 1 学習意欲の変化 一致度別 >

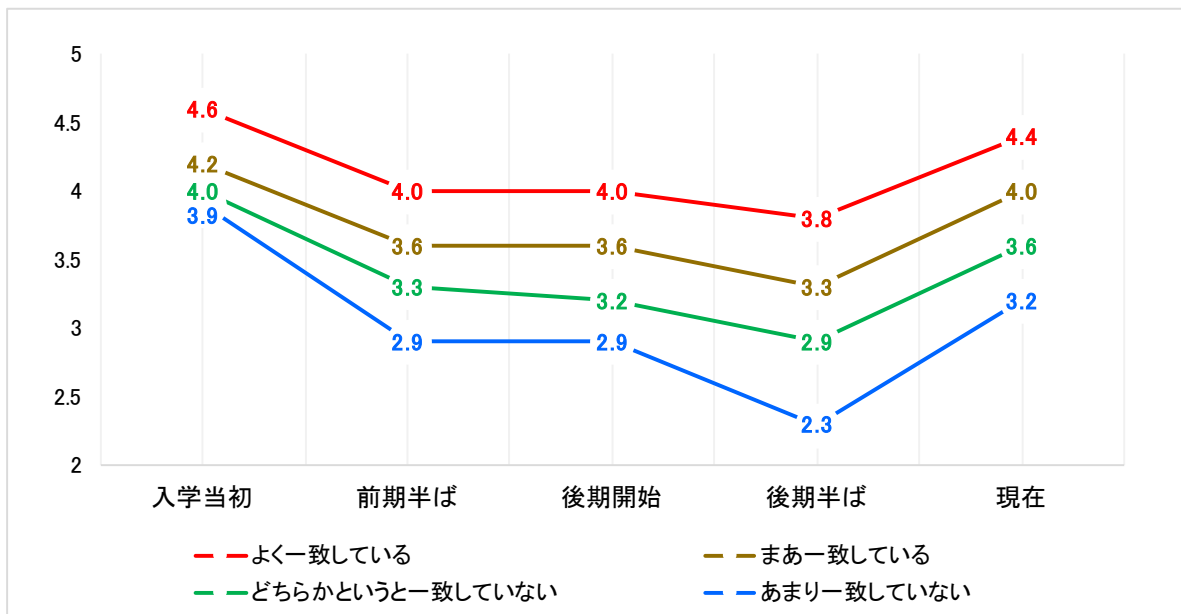


図 10 は Q.04 志望意識の回答群別に、学期ごとの学習意欲を数値化した（「①非常に意欲あり」を 5、最後の「⑤まったく意欲なし」を 1 とした）平均値を図にしたものであり、図 11 は同様に Q.06 一致度の回答群別に学習意欲を数値化し、学期ごとの経過を図示したものである。各学部での志望意識の有無、希望分野と専門分野の一致度が、学生の学習意欲にどの程度の影響を与えているかを検討するためである。

これらの図から入学後のどの時期においても、志望意識の有無により学習意欲に明確な差がでていることが分かる。一致度の良否においても学習意欲の差は明白である。予想されたように、学生が抱くこの二つ意識が、極めて明瞭に、入学後の学習意欲に大きな影響を与えている。

志望意識や一致度が悪い場合は、学習に対して「あまり意欲なし」、「まったく意欲なし」の比率が大きくなり、学期ごとの意欲低下が著しい。入学当初においても各回答群ですでに差がある（3.9~4.6）が、それほど大きな差ではない。しかし1年が経過して2回生になっても回復力が弱く、各回答群で大きな差（3.2~4.4）として残っている。先に懸念したように、志望 → 学習意欲 の悪循環を示す結果である。後述するように、学習意欲の低下は大学生活全般に波及することであり、今後とも注視して対策を講じていく必要がある。

5. 大学教育での向上感

入学後1年間の大学での学習を経て、学生が自己能力の向上についてどのような意識をもっているかをいくつかの要素能力について質問した。ここで「専門知識の向上」は、全学共通科目や教養教育の範囲ではないので除外し、それ以外の「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」、「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」、「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」、「自ら考え、主体的に行動する能力」、「英語の能力」の5つの能力に加えて、今年度から「専門分野で基礎となる学力」についてQ.12～Q.17で尋ねた。これらは多くの学部のカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに関連する項目であることから、学生が卒業するまでに「専門知識の向上」を含めて高い向上感を得られることが、教育効果の検証として重要となる。

Q.12 入学後1年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.13 1年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.14 あなたの専門分野で基礎となる学力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.15 1年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

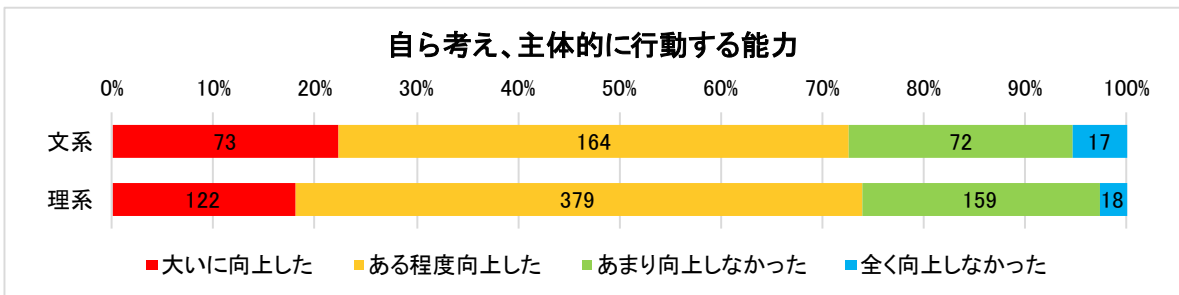
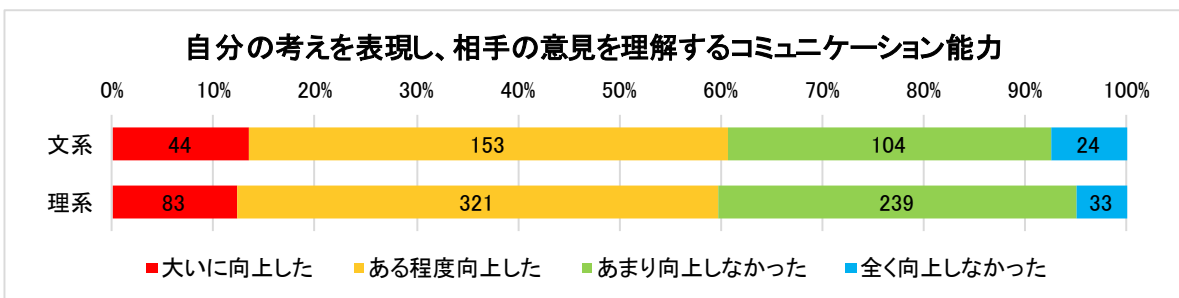
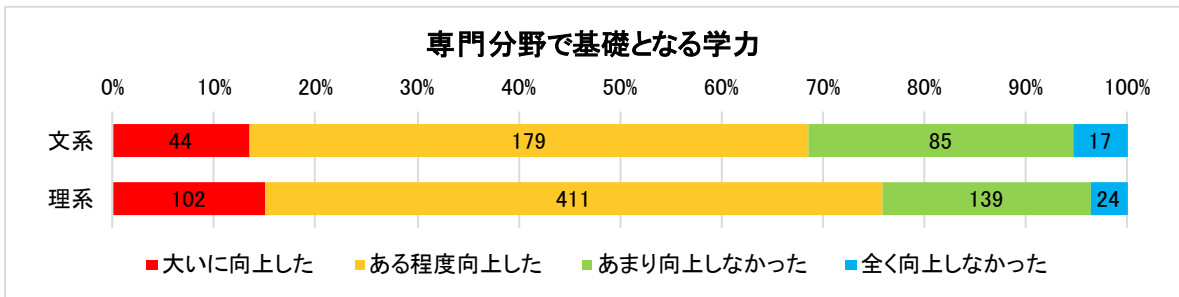
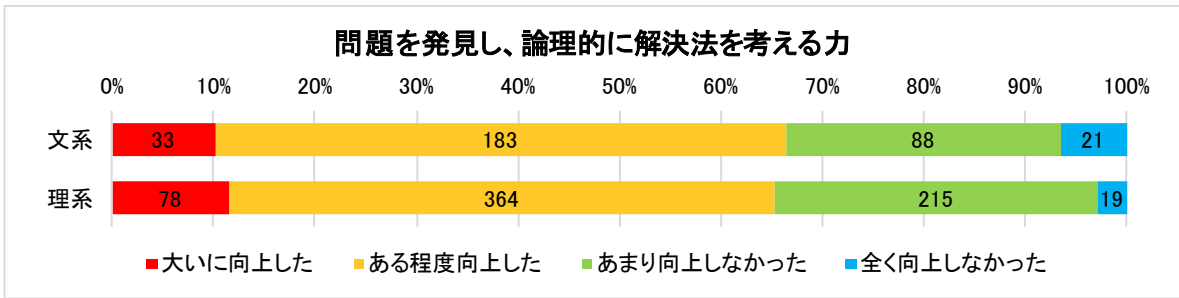
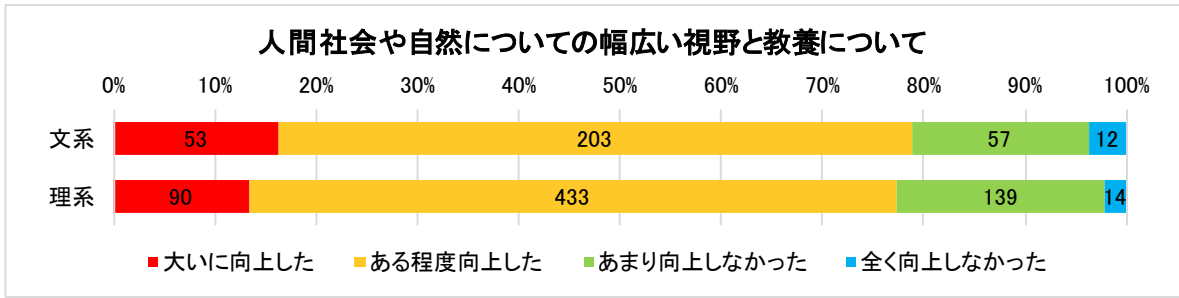
Q.16 1年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.17 1年間で、あなたの英語の能力（英語以外の言語を第1外国語とした方は、その言語の能力）はどの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

<図12 大学教育での向上感 各要素別>



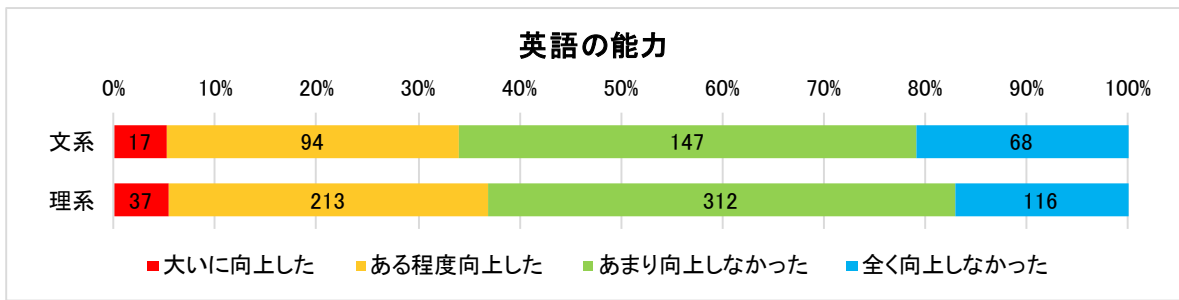


図 12 は各要素能力についての回答比率を図示している。「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見と、「あまり向上しなかった」、「全く向上しなかった」の否定的意見の比率に着目すると、概観としては、

「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」：平均約 78%(昨年：78%)

「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」：平均約 68%(昨年：61%)

「専門分野で基礎となる学力」：平均約 70%

「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」：平均約 62%(昨年：59%)

「自ら考え、主体的に行動する能力」：平均約 76%(昨年：71%)

「英語の能力」：平均約 37%(昨年：28%)

であった。

教養・共通教育としては、「幅広い視野と教養」と「主体的能力」の向上感が高いことは良い結果であり、前者がほぼ同じ、また後者が 5 point も向上していることは好ましい。今年初めて設問に加えた「専門分野で基礎となる学力」では、肯定的意見の割合には学部により大きな差がみられるという特徴がある。

2016 年度入学生から E 科目制度を導入して英語改革を進めているにも関わらず、「英語能力」についての向上感が昨年同様に低いことは残念な結果となっているが、今年は 28%→37%と 9 point も改善しており、明るい兆候と言える。今後とも授業改善のみならず、英語への関心や英語に触れる機会の増加、向上感、達成感が得られる仕組みについてさらなる検討が必要である。

2017 年度卒業生から卒業時アンケート（3 月実施）において、全学共通教育についての意識を問う設問を加えていただいた。これにより入学時の期待度からスタートし、2 回生進級時の実現度、満足度、そして大学生活 4 年間の総括としての全学共通教育の効果に関する意識をシリーズで観測できるようになった。

以下に卒業時アンケートから全学共通教育での学習に関する 5 項目についての調査結果を転記した。

【参考資料】2018年度卒業生進路調査アンケート結果より転載

全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べて以下の項目はどの程度向上した又は得られたと思いますか。

(1) 専門以外の幅広い知識・教養

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

(2) 専門分野で基礎となる学力

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

(3) 英語の能力（英語以外の言語を第1外国語とする人はその言語能力）

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

(4) 第2外国語の能力（外国人留学生については日本語の能力）

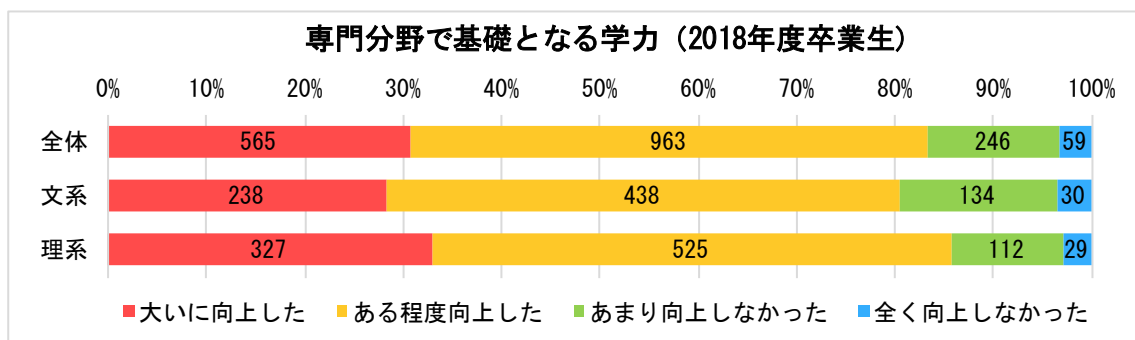
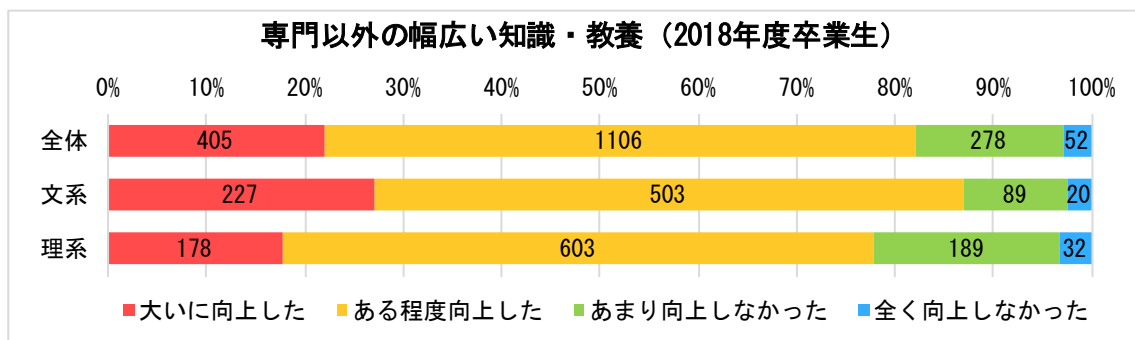
- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

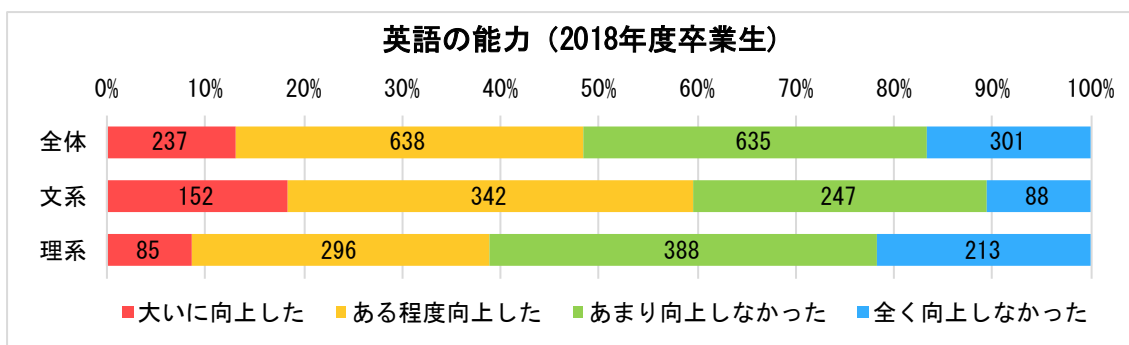
(5) 将来の研究分野や進路を決める手がかり

- ①大いに得られた ②ある程度得られた ③あまり得られなかった ④全く得られなかった

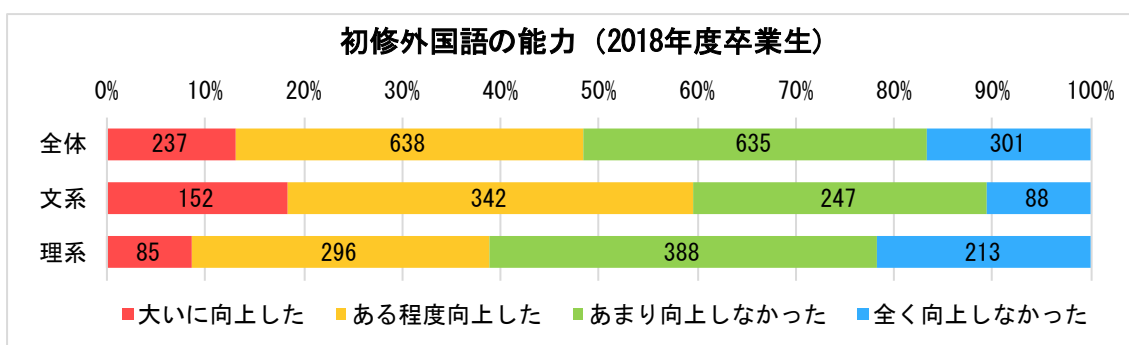
* 医（医）は設問なし

< 図 1 3 卒業生進路調査アンケート結果 全共分抜粋 >

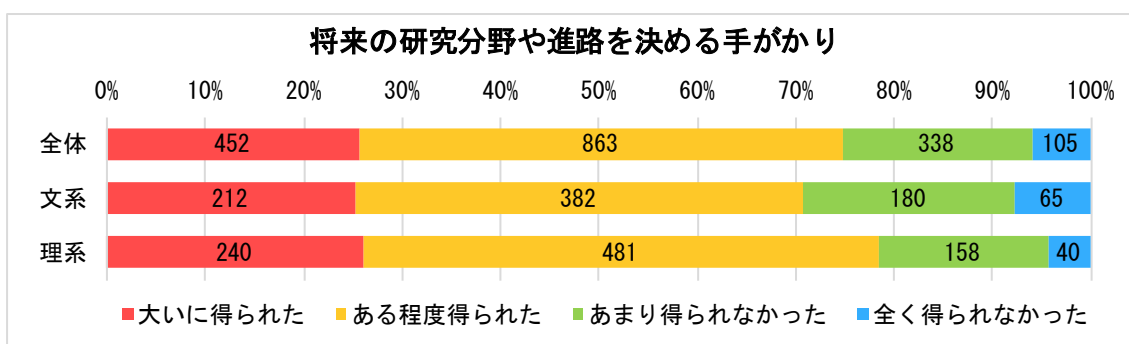




* 英語以外の言語を第1外国語とした方は、その言語の能力



** 外国人留学生については日本語の能力



※医（医）は設問なし

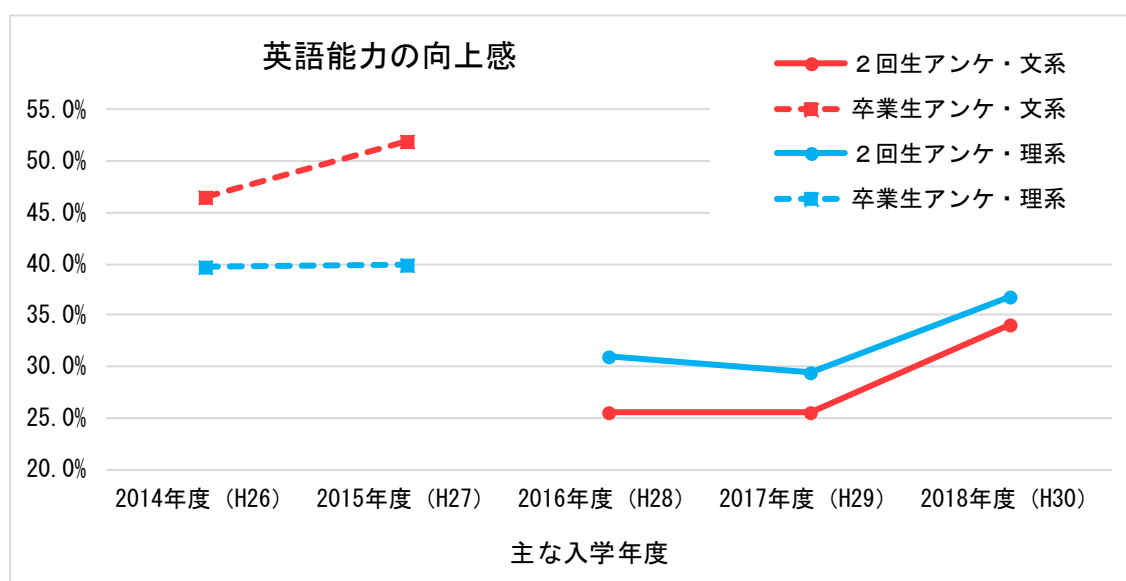
この中で、(1) 専門以外の幅広い知識・教養、(2) 専門分野で基礎となる学力、(3) 英語の能力の3項目は、2回生進級時アンケートと共通であることから、回生による向上感の変化をみることができる。ただし、2019年3月在籍の4回生（主として2015年度入学生）と、2019年5月在籍の2回生（主として2018年度入学生）の意見であることから、ほぼ同一のカリキュラムで教育を受けた学生群の意見変化であるが、同一群の3年間（2回生→4回生）の意見変化を示すものではない。

概観すると(1) 幅広い知識・教養では、2回生も4回生も「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見がほぼ80%であり、文系学部でやや伸びが見られるものの回生による変化はほとんどないと言える。しかし(2) 専門分野の基礎では2回生の肯定的意見が70%程度であるのに対して、4回生では80%を超える学部が大半であることから、学部専門教育を修了した段階の方が基礎教育の意義をより自覚できるのではないかとと思われる。

(3)の英語能力では、やはり卒業時でも肯定的意見が40%程度と、他の調査項目と比較して低くなっている。しかし2回生進級時点の結果と比較すると、文系では顕著に向上感が上昇していることが特徴的である。正確な理由は不明であるが、文系では2回生以降においても外国語教育への配当単位が多く、英語教育を受ける機会が多いためではないか、と推測される。ほぼゼロからスタートする初修外国語のグラフでは、文系と理系のカリキュラムの差が向上感の差となって明確に表れている。

◇英語の能力の向上感について、2回生進級時アンケートと卒業生アンケートを比較

<図14 英語能力の向上感>



今後、毎年アンケート結果を継続して表示するため、図14に、回答者の主な入学年度を横軸にして、文系と理系の英語能力の向上感（肯定的意見の%）の経時変化を示した。今回は赤青（実線と破線の）2つの線の年度が離れているが、もう数年経過すれば同一群の意見変化を経年変化として読み取ることができるはずである。図14で明らかのように、今年度の2回生は文系も理系も、昨年度と比較して向上感が増加している。上述のように本学では英語科目を次第に増やし2016年にはE科目制度を主とした英語教育改革を実施した。今後もE科目制度の改革改善を進めていく中で、学生の向上感にどのような変化が現れるかを注視していきたい。

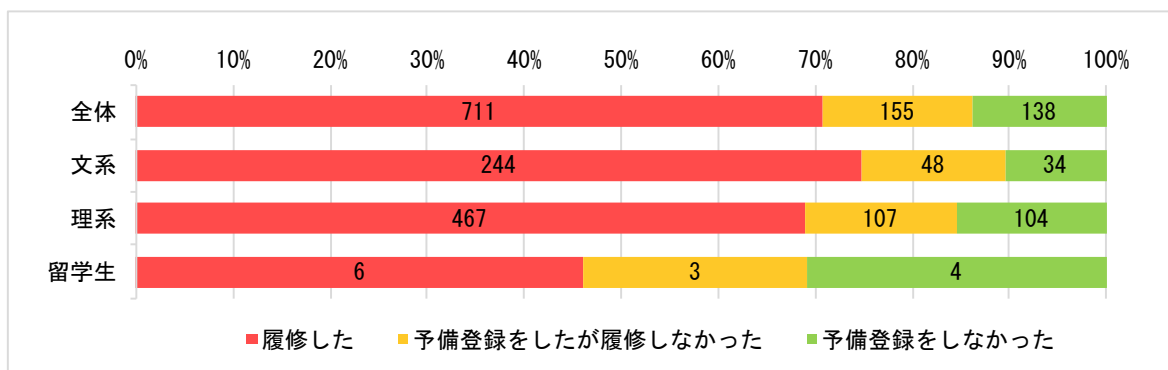
6. ILAS セミナー・実習・実験科目の受講

1998 年度に始まる新入生向け少人数セミナー（通称：ポケット・ゼミ）は、開始以来開講数が大幅に拡大して現在の ILAS セミナーに至っている。ILAS セミナーは、主に新入生を対象に、「ILAS セミナー」、「ILAS Seminar-E2」、「ILAS セミナー（海外）」の3種類が開講されている。各学部・研究科・研究所・センター等の教員が、Face to Face の親密な人間関係の中で、様々なテーマを扱った少人数ゼミナール形式の授業として企画され、入学当初の重要な初年次教育と位置づけられている。2019 年度においては、265 科目が開講され、受講定員 2,814 名、受講申し込み者数 2,497 名、受講許可者数 2,191 名であった。入学者の約 75%がいずれかの科目の受講許可を得ている。入学者に対する受講申し込み率、申し込み者に対する受講決定率は開講科目数の増加とともに向上したものの 86～88%前後で停滞しており、結果として入学者に対する受講許可率は約 75%となっている。その理由を調査して今後の改善策を検討することが目的である。

Q.18 1 回生で ILAS セミナーを履修しましたか。

①履修した ②予備登録をしたが履修しなかった ③予備登録をしなかった

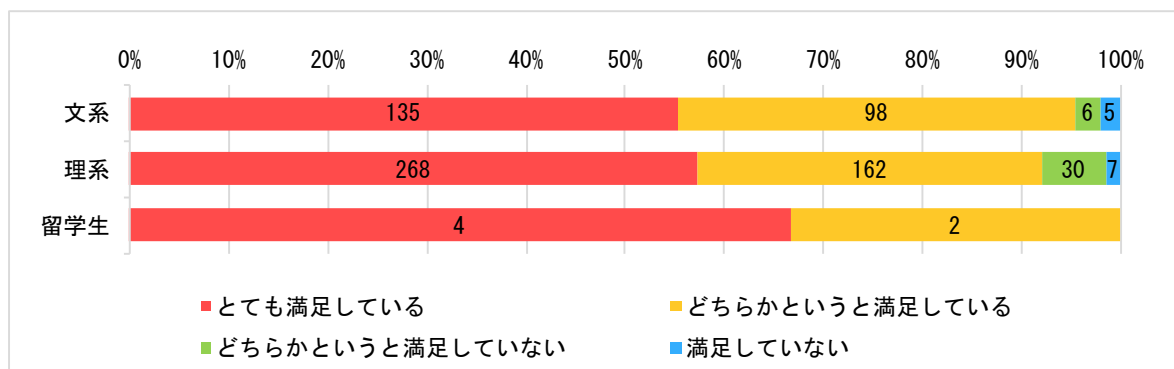
<図 1 5 ILAS セミナーの受講>



Q.18 では、受講の有無を尋ねた。「ILAS セミナー」では少人数ゼミという性格上、最小 5 名から最大 15 名までの定員を設けている。2019 年度から第 5 希望まで（それまでは第 3 希望まで）の予備登録を可能にして、抽選により履修許可を出している。その結果として、「履修した」の比率が全体で 5 point 程度増え（65%→70%）、「予備登録したが履修しなかった」が 5 point 減少して（20%→15%）になったものと思われる。また 14%が予備登録そのものをしなかった。文系と理系を比較すると、理系の履修率が低くなり、文系：74%、理系：69%という結果であった。その理由については Q.20 で問うことにする。

- Q.19** Q.18 で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。
 ①とても満足している ②どちらかという満足している ③どちらかという満足していない
 ④満足していない

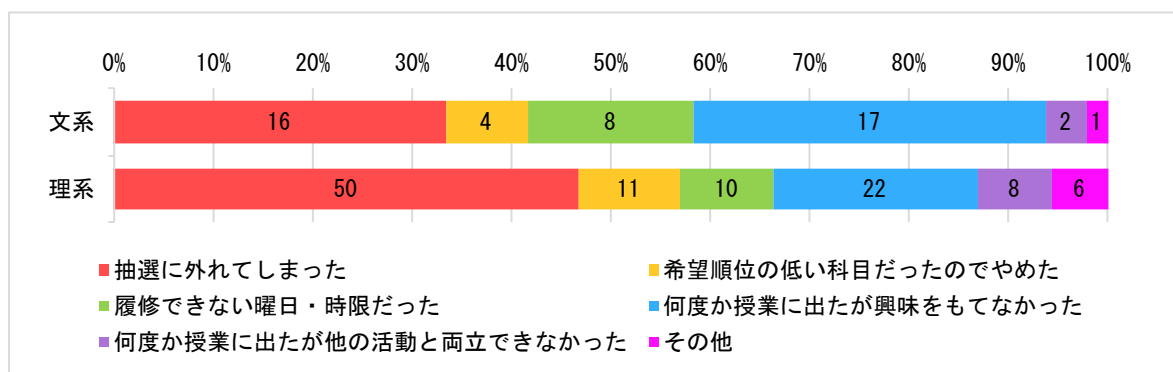
<図16 ILAS セミナー履修者の満足度>



Q.19 では、ILAS セミナーを履修した学生の満足度を尋ねた。図に示したように、「とても満足」と「どちらかという満足」を合わせると 90%以上の学生が学習内容に満足しており、昨年よりもさらに向上しているという結果である。

- Q.20** Q.18 で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。
 ①抽選に外れてしまった ②希望順位の低い科目だったのでやめた ③履修できない曜日・時限だった
 ④何度か授業に出たが興味をもてなかった ⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
 ⑥その他（記述回答）

<図17 ILAS セミナー：予備登録したが履修しなかった理由>



この設問で「予備登録をしたが履修しなかった」理由を問うた。その結果、理系では約半数の学生が「抽選に外れてしまった」ことを理由に挙げた。しかしその比率は、今年から第5希望まで受け付けた効果により、昨年と比較して文系 47%→33%、理系 54%→46%と大きく減少した。Q.18 で理系の履修率が文系と比較して少ない理由はおそらく理系学生の好む科目数が学生数に対して少ないため競争率が上がっている、あるいは理系学生の分野選択の幅が狭い等が考えられる。理由に応じた対策を考える必

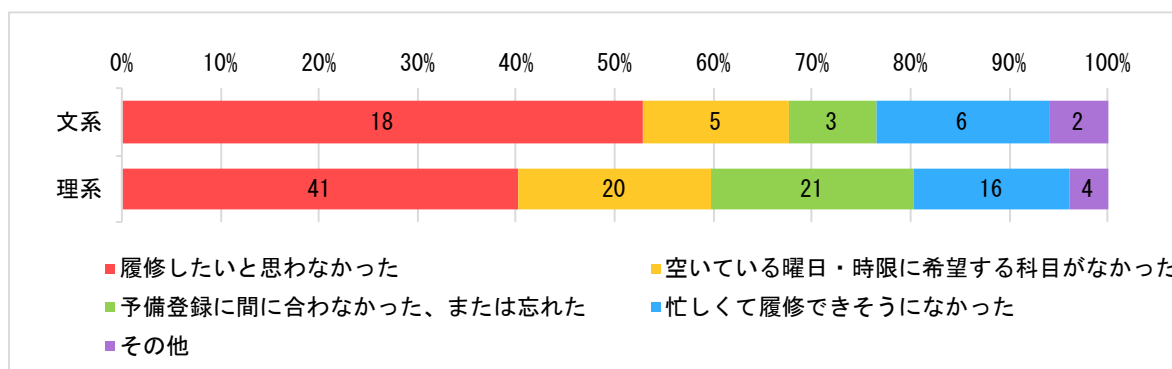
要がある。また抽選外れを防ぐ方策としてすでに予備登録の希望候補を3科目から5科目に増やしたが、次の方策として、許可者の履修登録率が80%であることを考慮して許可者を定員+1程度にすること、また人気は高いが定員が少ないILASセミナーの定員を若干増やすこと等、担当される教員のご理解を得て実質的な定員増を図ることが考えられる。

次に多い理由は「何度か授業に出たが興味をもてなかった」であった。昨年の「履修できない曜日・時限であった」と入れ替わって増加している。

Q.21 Q.18で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。

- ①履修したいと思わなかった
- ②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
- ③予備登録に間に合わなかった、または忘れた
- ④忙しくて履修できそうになかった
- ⑤その他（記述回答）

<図18 ILASセミナー：予備登録をしなかった理由>

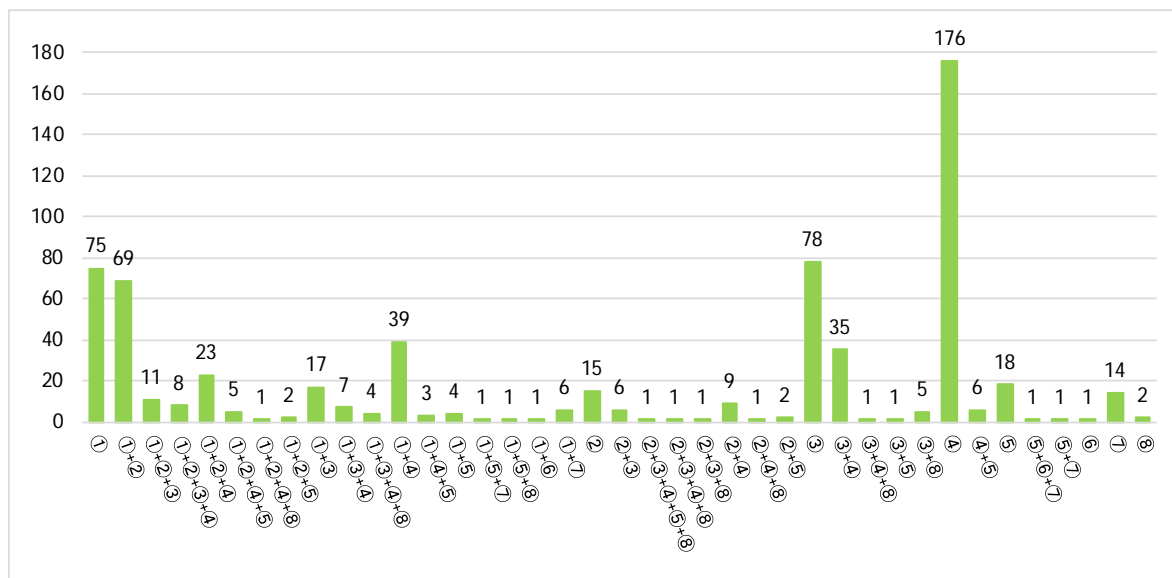


「予備登録をしなかった」学生に理由を尋ねた結果、「履修したいと思わなかった」が約半数あり「空いている曜日・時限に希望する科目がなかった」の回答を加えると約60%になる。Q.18で予備登録をしなかった学生の比率が全体の14%であったことを考慮すると、入学者の約7%はもともと「履修したいと思わなかった」と回答しており、ILASセミナーそのものに関心をもっていないことになる。

Q.22 スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、地球科学実験のうち、1回生で履修した科目に□チェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。

- ①スポーツ実習 IA ②スポーツ実習 IB ③物理学実験 ④基礎化学実験
 ⑤生物学実習Ⅰ ⑥生物学実習Ⅱ ⑦生物学実習Ⅲ ⑧地球科学実験

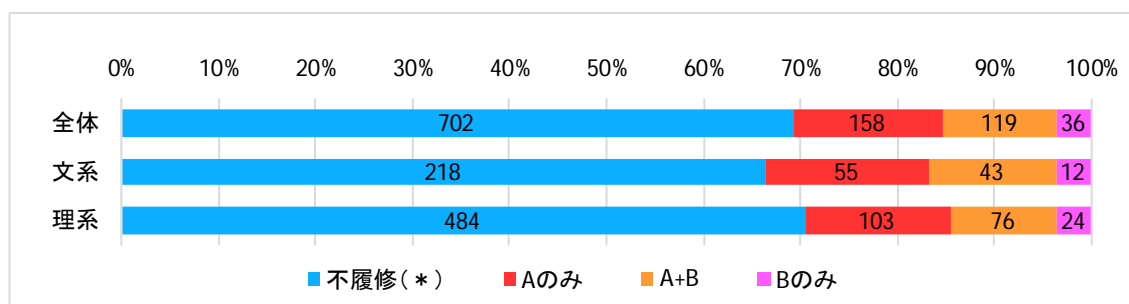
<図19 回答数と履修した科目の組み合わせ>



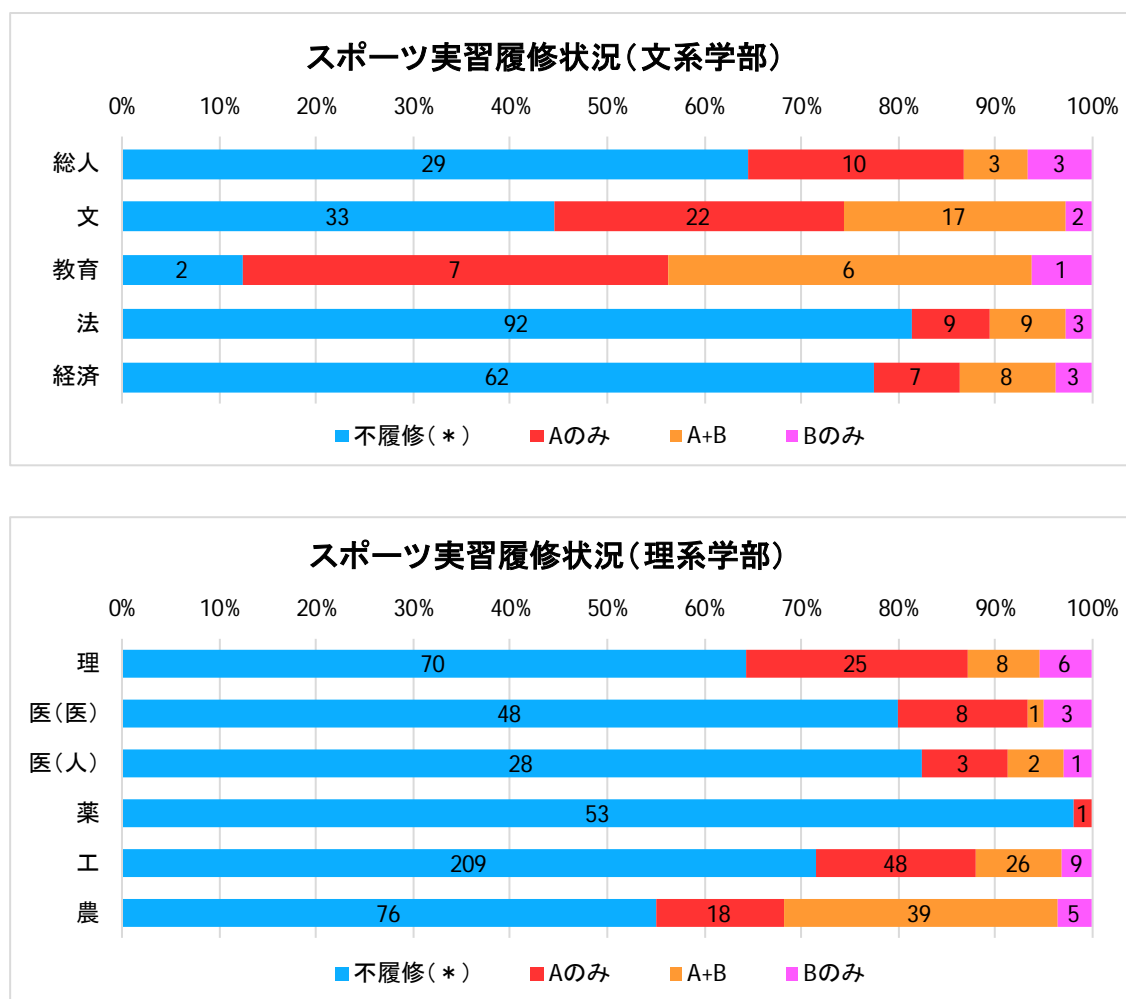
*参考：チェックなし 363名

Q.22 では、いわゆる1単位科目の履修状況を尋ねた。スポーツ実習と理系の実験科目が該当する。それぞれの科目の意義は明確に設定されているが、その意義とは無関係に、学習時間やコマ数の割に単位が少ないという理由で、履修を敬遠するという傾向にある。その実態を調べることが本設問の目的である。

<図20 スポーツ実習履修状況>



<図 2 1 スポーツ実習履修率（上：文系学部、下：理系学部）>



(*1) 「Aのみ」には「スポーツ実習IA」に加え実験・実習科目をチェックしている学生も含む。「Bのみ」「A+B」も同様。

(*2) 「不履修」は本設問にてスポーツ実習にチェックを入れていない、もしくは本設問の科目はいずれも履修していない場合とする。

上図のように、学部により履修動向に大きな差がある。医医、医人、薬学では80%以上の学生が不履修であるが、一方、教育では不履修が10%に留まる。各学部のクラス指定の有無やカリキュラムによりこのような差が現れる。全体平均として約70%の学生がスポーツ実習を履修しておらず、その傾向は年々強まっている(2018年度:61%→2019年度:69%)。学部別に見ると、文系の法学、経済では不履修が10 point程度の増加、理系の医人で10 point、農学で17point、薬学では79%→98%と不履修者が19 pointも増加した。必須ではない1単位科目を避けて効率的に単位を取得しようという傾向がますます強まっている。

またQ.35で後述するように30~40%の学生は1週間を通してほとんど運動をしていないという事実は、多くの学生が18~19才の若者として健康的とは言えない学生生活を送っていることを示している。

次に、理系の実験科目について結果を述べる。まず参考資料は、2018年度の実験科目履修者数であり、実験科目全体の実施規模を概観できる。

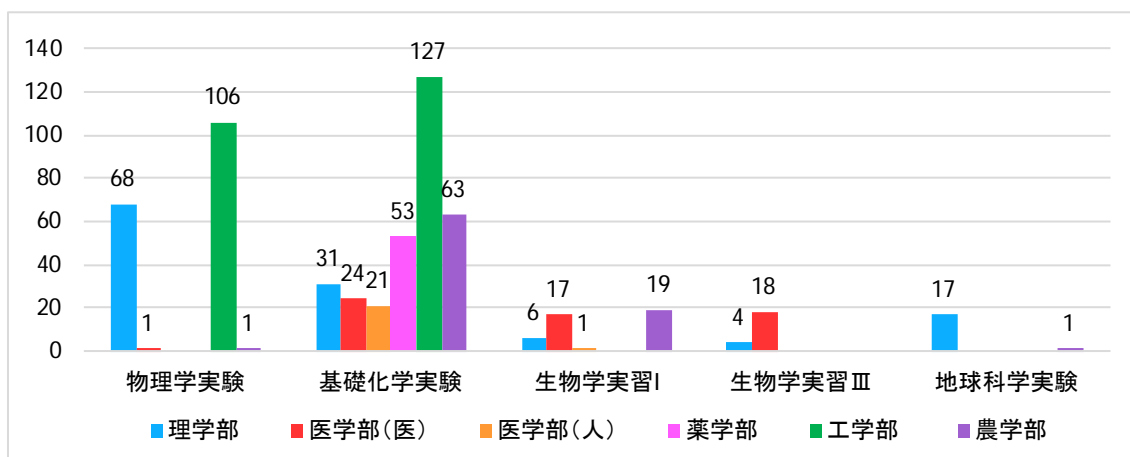
◆参考資料（履修取り消し後の数値、院生・非正規生を含む）

	2018(前)	2018(後)	全体	2017(全体)
物理学実験	276	188	464	527
基礎化学実験	341	377	718	724
生物学実習Ⅰ	80	57	137	109
生物学実習Ⅱ	19	14	33	19
生物学実習Ⅲ	28	22	50	48
地球科学実験	31	25	56	67

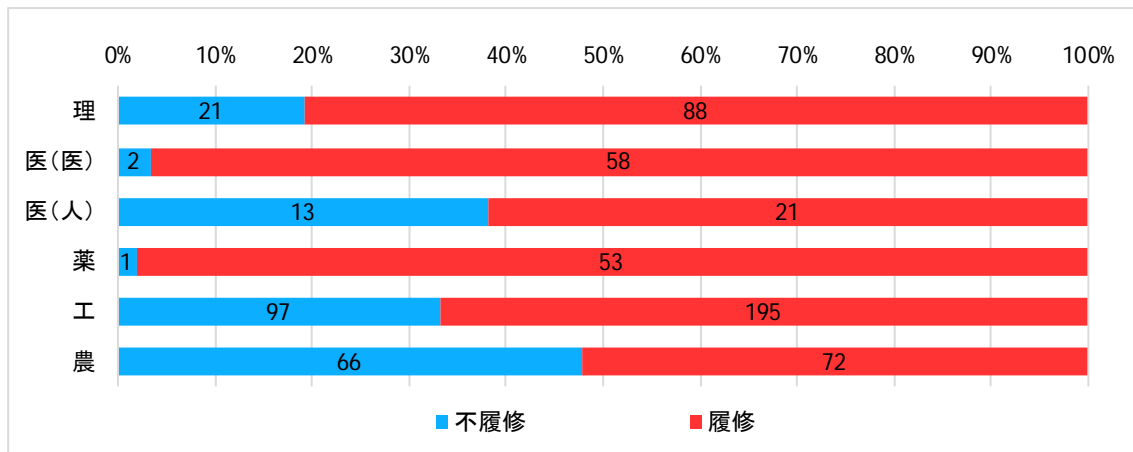
これらの実験科目の中で、生物学実習のみ履修者が増加する傾向にあるが、医学部での選択必修化や農学部でのガイダンスの効果が表れているものと考えられる。基礎化学実験ではほぼ横ばい、物理学実験では漸減傾向が続いており、先に述べたコストパフォーマンスが悪いという学生意識が履修者減少を招いているものと思われる。そのような安易な方向に流れないように、各学部は分野の特性に応じた履修指導を強める必要があるだろう。

下図は、実験科目を履修した理系学生の回答数を学部別、実験別に示したものである。一目して分かるように、物理学実験は理と工の学生が履修し、基礎化学実験は全ての学部から履修しているが主に工、農、理、薬から、生物学実習は農、医、理から、地球科学実験は理の学生が履修するという結果である。

<図22 理系学部別実験履修者数>



<図 2 3 理系学部別実験科目不履修率>



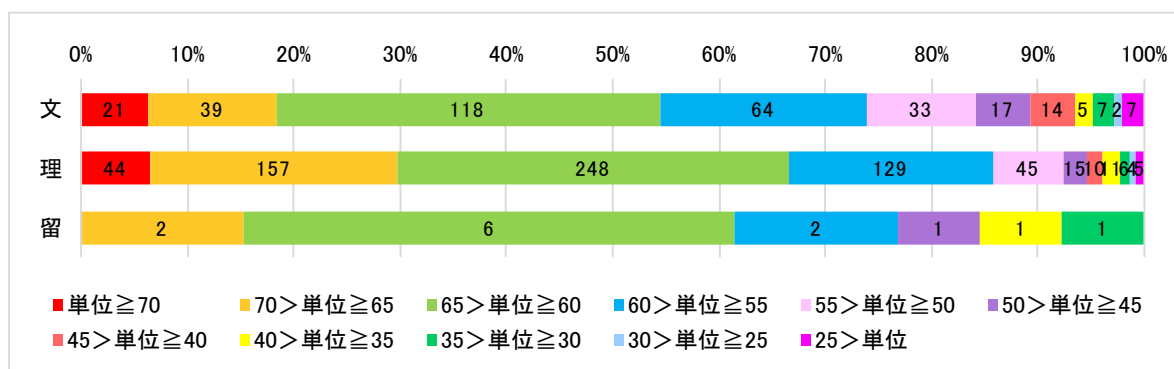
次の図は、1科目も実験を履修していない学生の割合を図示している。昨年は医人と薬学で約半数の学生が実験を履修しなかったが、今回の調査では著しく改善している（医人：54%→38%、薬学：55%→2%）。学部教育として実験科目のクラス指定を明確にされた効果である。一方、工学、農学のように必修または選択必修であっても不思議でない理系学部の30%以上の学生が実験科目を履修していないのは驚きである。特に、農学でその傾向が強く現れている（36%→48%）。もし単位取得効率でこのような傾向が助長されているとするならば、嘆かわしい結果である。なお、文系学生の実験科目履修はごく僅かであったことから、上記の考察より除外した。

7. 履修動向と成績

Q.23 あなたは1回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。

- ①単位 \geq 70 ②70>単位 \geq 65 ③65>単位 \geq 60 ④60>単位 \geq 55 ⑤55>単位 \geq 50 ⑥50>単位 \geq 45
 ⑦45>単位 \geq 40 ⑧40>単位 \geq 35 ⑨35>単位 \geq 30 ⑩30>単位 \geq 25 ⑪25>単位

<図24 取得単位>



単位の実質化の議論において、授業時間ならびに予習・復習・課題等に要する授業外学習時間を十分に確保することが重要である。大学設置基準では2単位授業1コマにつき4時間の授業外学習時間が求められており、そのためには1日に学習する授業コマ数は適切に抑制される必要がある。本学では全学共通科目にCAP制を導入して、多くの学部が1学期34単位（総人は20コマ）を上限としている。しかしながら、全学共通科目に加えて学部により専門基礎科目の履修が課せられていること、集中講義等の制限外科目があること等から、1回生で70単位以上も取得する学生が散見される事態となっている。そこでこの設問では1回生の年間取得単位数を調査した。昨年からの調査単位数を「単位 \geq 70」まで上げたため、より明確に実態を把握することができた。

図24の全体像では、昨年とほぼ同じ傾向が続いている。文系学部では60単位以上を取得した学生が54%、理系学部では67%（65単位以上取得の学生比率では、文系学生の18%、理系学生の30%）もあり、1回生で過剰な単位を取得することが常態化していると言える。本学の多くの学部で卒業要件となっている138~156単位（大学設置基準では124単位）と比較すると、要卒単位の約半分を1年間で取得するという事態であり、本学の1回生は明らかに単位取り過ぎの状態にある。これは単位の実質化の要請からも、また標準修業年数4年という教育体系から見ても異常な状態であり、早急に改善するための対策を取る必要がある。本学では、学年を問わず各学部がセメスター30単位を目安としてCAP制を導入することになった。現時点ではまだ検討段階ではあるが、特に1回生については深刻な状況であり、早急な実施が望まれる。

各学部で学生の履修行動を把握し、1回生、特に前期に配当する教養・共通科目や専門基礎科目の種類や単位数等、1・2回生のカリキュラム全般について再検討されるように希望する。

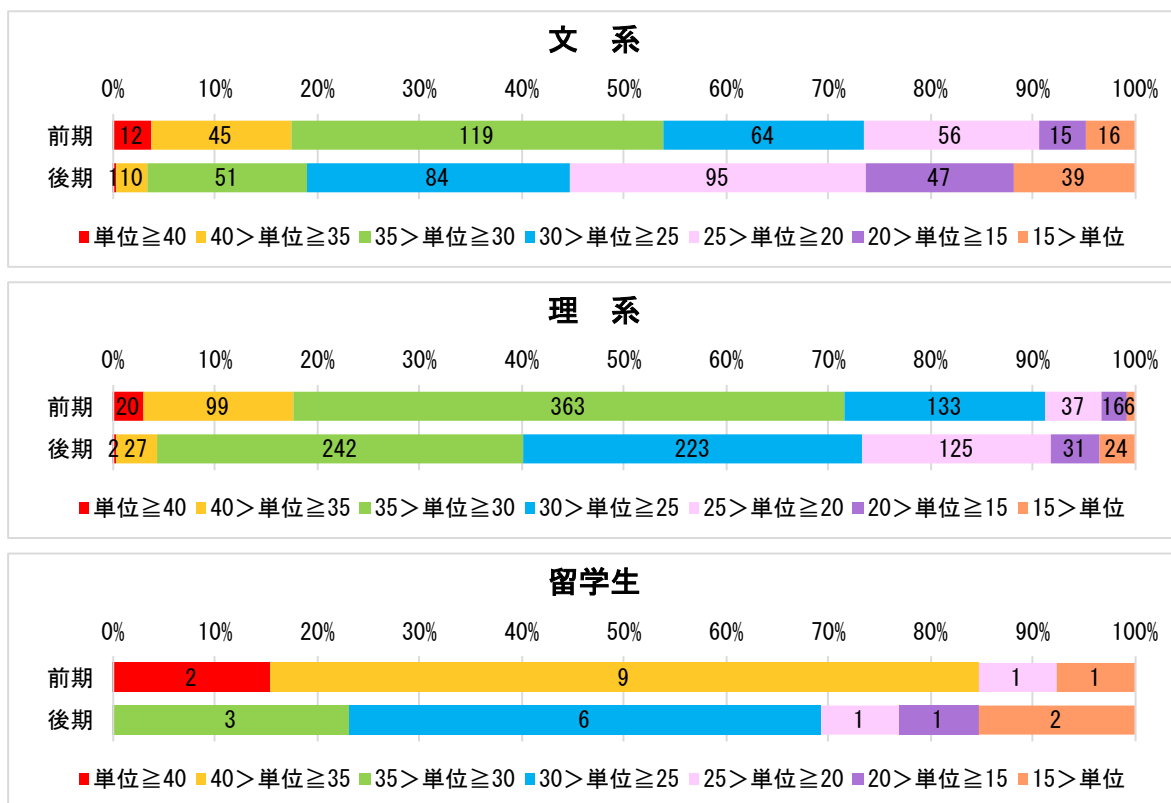
Q.24 Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20 ⑥20>単位 \geq 15
⑦15>単位

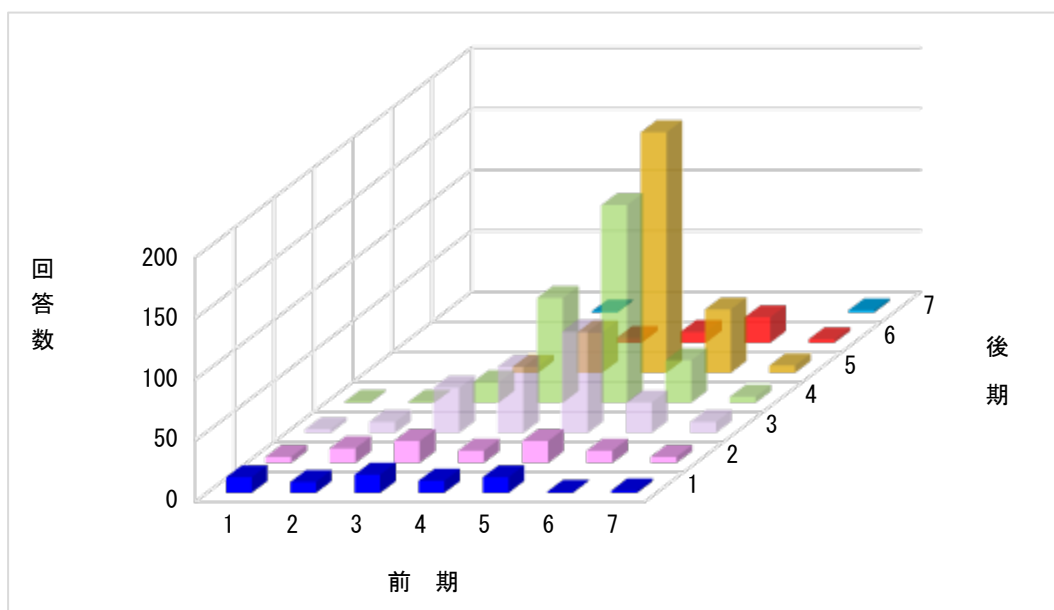
Q.25 Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20 ⑥20>単位 \geq 15
⑦15>単位

< 図 2 5 全学共通科目の取得単位 >



< 図 2 6 全学共通科目の取得単位・前後期の相関 >



※グラフの数値は以下のとおりとする。

「単位 ≥ 40 」を7、「 $40 > \text{単位} \geq 35$ 」を6、「 $35 > \text{単位} \geq 30$ 」を5、「 $30 > \text{単位} \geq 25$ 」を4、「 $25 > \text{単位} \geq 20$ 」を3、「 $20 > \text{単位} \geq 15$ 」を2、「 $15 > \text{単位}$ 」を1

Q.23 に続いて、取得単位の内の全学共通科目の単位数を前期、後期に分けて調査した。Q.23 と同様、以前の調査では単位数区分が不十分であったため、Q.24、25 でも「単位 ≥ 40 」まで拡大した。

図 25 で文系、理系で比較すると理系の方が取得単位数の多い学生比率が高い。全体としてどの学部でも前期と比べて後期の履修は少なくなるが、学生数の多い理系学部では、前期・後期とも 50%~70% の学生が 30 単位以上を取得していることから、1 回生 1 年間では 70 単位に近い単位数を過半数の学生が取得していることになる。

図 26 では、前期・後期の単位取得数の相関を見ている。上述のように「 $35 > \text{単位} \geq 30$ 」の区分 5 は、CAP 上限の区分であるが、意外なことに、それより多い区分 6、7 にも相当数の学生がいる。これは時間割に現れない集中講義を履修して単位を取得した学生と思われる。図 26 でピークになる「前期 5、後期 5」の枠に着目すると、手前側（後期で 4、3、2 と少ない単位数側）に尾を引く分布になることから、前期に多くの単位を取得した学生は、後期において抑制気味に履修する傾向が見て取れる。相対的に学生数の多い理系学部で、前期、後期とも 30 単位以上取る学生が半数以上いることから、全学でも「前期 5、後期 5」の枠がピークになる。前期区分 4 グループの後期履修をみても、「前期 4、後期 4」が最大値になっていることから、多くの学生の履修行動は前期、後期で継続性があることを示している。先に述べたように、これらの早期過剰取得については、各学部の 1 回生カリキュラム、履修指導、CAP 制度の適正化により是正していく必要があるように思われる。

Q.26 1回生の間に単位を取得した「人文・社会科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

Q.27 1回生の間に単位を取得した「自然科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

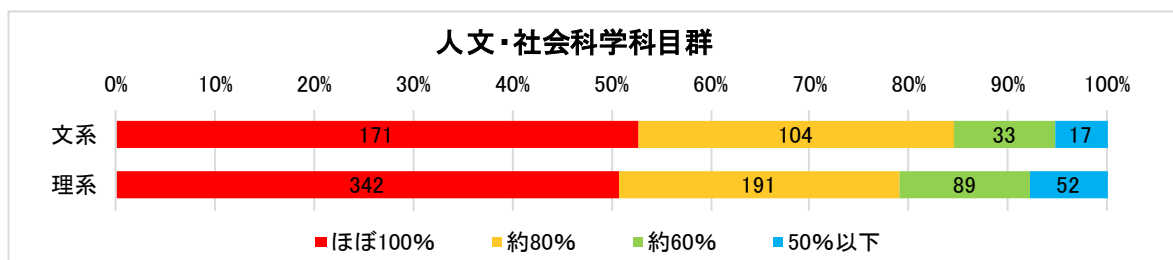
Q.28 1回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の英語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

Q.29 1回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の初修外国語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

<図27>



4科目群（「人文・社会科学科目群」「自然科学科目群」「外国語科目群・英語」「外国語科目群・初修外国語」）の授業出席率を学部別に記載した。実際に出席回数を計測したのではなく学生本人の意識による集計であることに留意されたい。図27は人文・社会科学科目群の出席率を示したものである。授業に付いていくためにはやはり「80%以上」の出席率が必要と考えるが、学部による格差が大きい。平均的には全体の80%程度の学生が「80%以上」の出席率と答えている。

<図28>

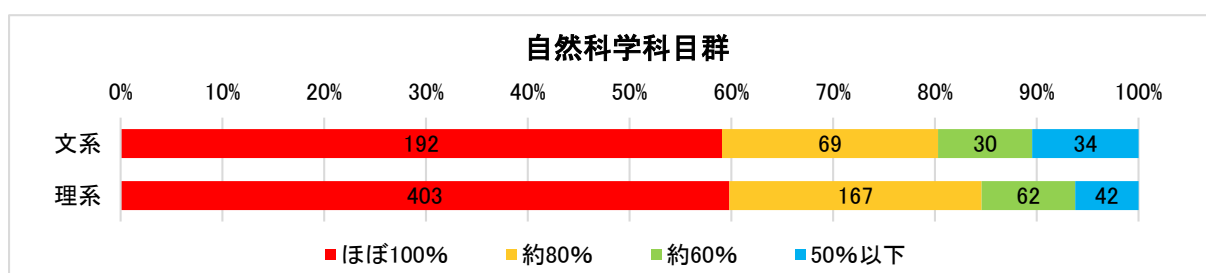
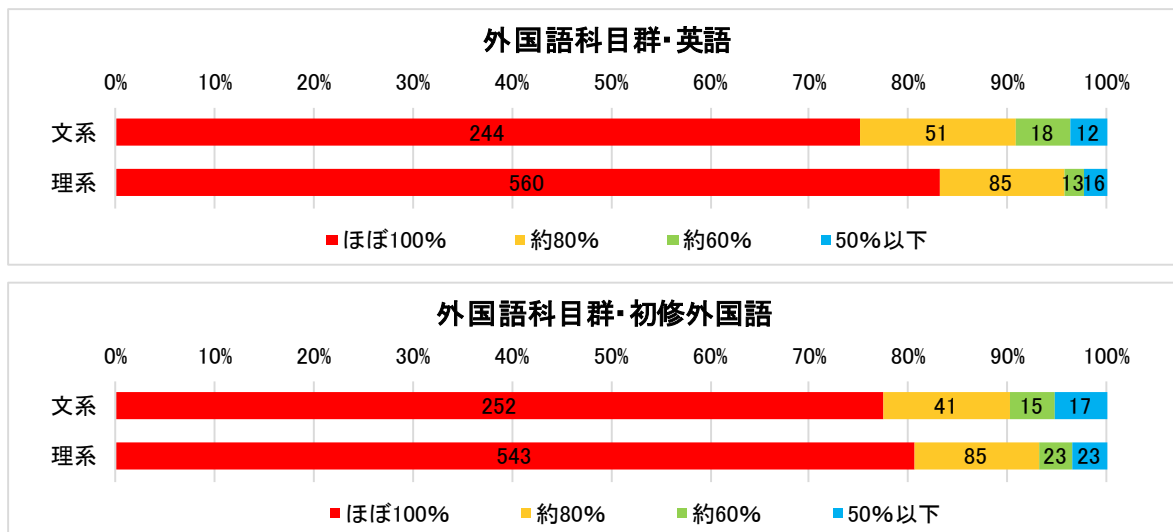


図 27 と同様に、「自然科学科目群」について尋ねたものがこの図である。結果は図 27 とほぼ同じであるが、人文・社会科学科目群より 5～10 point 程度出席率は高く、また昨年より改善している学部が多い。

<図 2 9 上：英語、下：初修外国語>



英語と初修外国語の出席率は高く、ほとんどの学部で「ほぼ 100%」と回答した学生の割合は 70%を超えており、「80%以上」では全体の 90%程度になっている。

このように 4 科目群で比較してみると、語学科目の出席率は人文社会科学科目群と自然科学科目群の出席率よりも明確に高い。出席点検や授業内での積極的な参加が求められる語学と、講義形式が多い一般科目との授業形態の差を反映しているものと思われる。教養・共通教育の在り方の議論において参考になる結果である。

Q.30 あなたの 1 回生（前期＋後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1 回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください（非公開）。

- ①GPA \geq 4.0 ②4.0 > GPA \geq 3.5 ③3.5 > GPA \geq 3.0 ④3.0 > GPA \geq 2.5 ⑤2.5 > GPA \geq 2.0
 ⑥2.0 > GPA \geq 1.5 ⑦1.5 > GPA

Q.31 あなたが 1 回生後期（2018 年 12 月）に受けた TOEFL ITP のスコアはどのレベルでしたか。

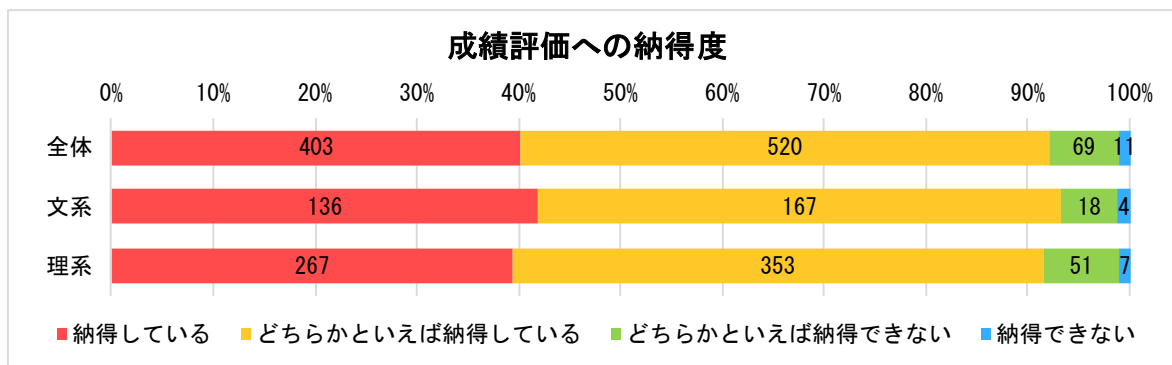
- ①スコア \geq 550 ②547 \geq スコア \geq 503 ③500 \geq スコア \geq 450 ④447 \geq スコア（非公開）

8. 成績評価への納得度

Q.32 1回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします：全体として自分の成績評価に納得していますか。

- ①納得している ②どちらかといえば納得している ③どちらかといえば納得できない ④納得できない

<図30>



成績評価の納得度については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。「納得している」、「どちらかといえば納得している」を合わせると、肯定的な回答をした学生はほぼ90%になっており、納得度は高いと言える。

<表3>

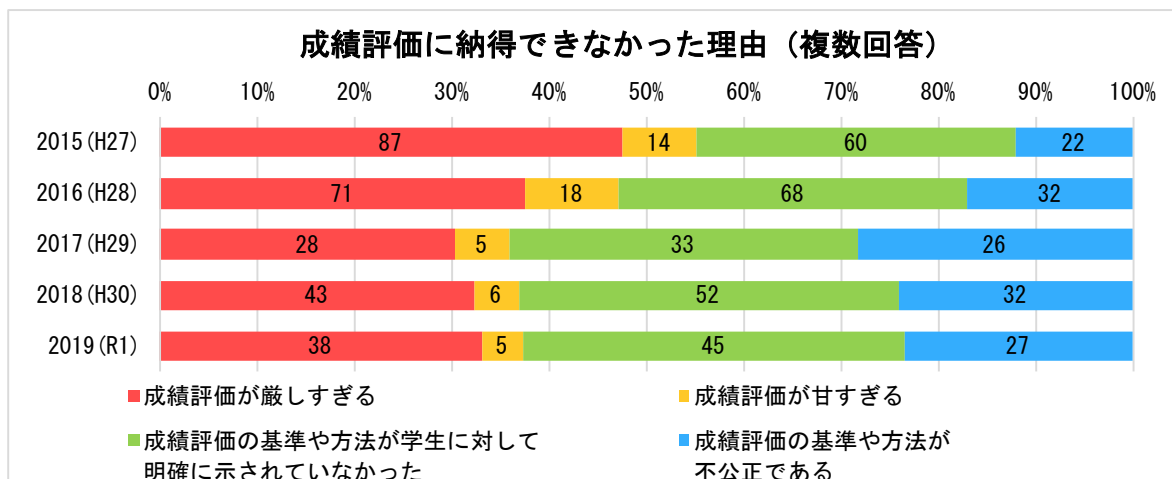
	2005	2016	2017	2018	2019
納得している	39%	46%	41%	42%	40%
どちらかといえば納得している	46%	43%	48%	50%	52%
どちらかといえば納得できない	10%	8%	8%	6%	7%
納得できない	5%	3%	3%	2%	1%

この統計を取り始めた初期の頃（2005年（平成17）年）と、最近の傾向を比較するために、回答における各項目の百分率を表に示した。上述したように「納得している」、「どちらかといえば納得している」を合わせると、最近では毎年肯定的な回答が90%以上を維持している。

Q.33 Q.32で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものにチェックをつけてください。

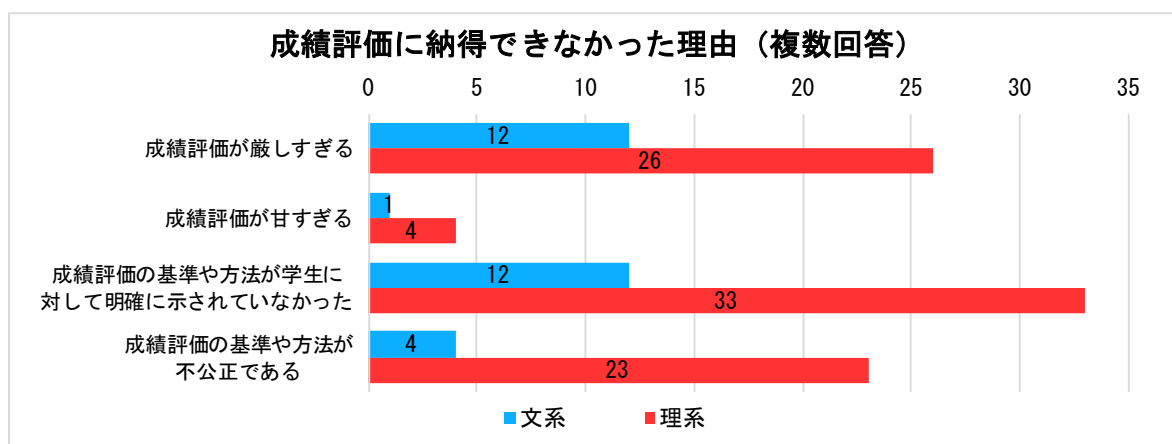
- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる ③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない
 ④成績評価の基準や方法が不公正である ⑤その他（記述回答）

<図 3 1 >



Q.33では成績評価に納得できない理由を尋ねた。この質問は毎年継続して質問している項目である。複数回答を可能にしているので、全回答における①～④の比率を図示している。3年前の2015年度からのデータと合わせて変化を見ると、①の「厳しすぎる」の割合は次第に減る一方、③、④の「不明確」「不公正」と感じる学生の割合が増加している。推測であるが、GPAの導入で成績に対する関心が高まり、相対評価としての明確さ、公平さを求める意見が強くなっているのではないだろうか。ただし、回答全体の90%の学生は納得している」と答えており、この項については回答者のうち約10%の意見であることに留意して判断する必要がある。

<図 3 2 >



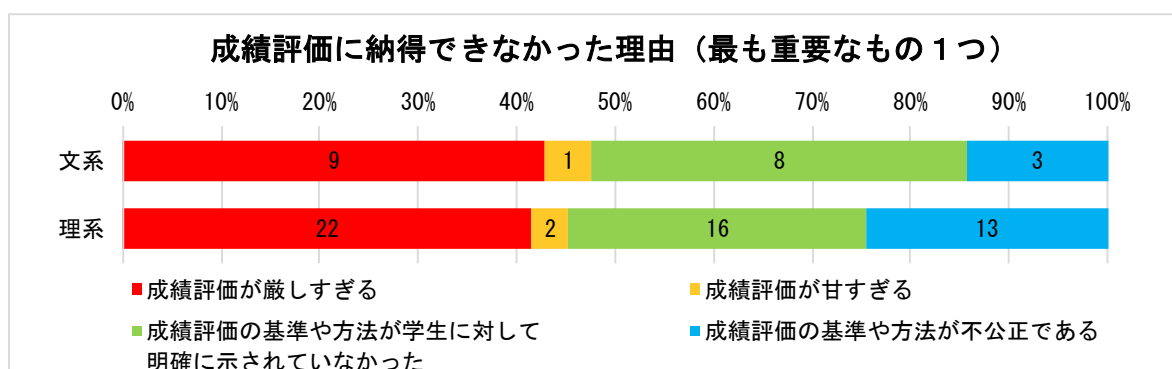
この図では文系と理系で回答度数を単純に表示している。以前の調査では、文系学生は①の「成績評価が厳しすぎる」が最も多く、次いで③「基準や方法が不明確」が多い時期があった。しかし、昨年より文

系、理系とも似た傾向になり、③「基準や方法が不明確」が最も多く、次いで①の「成績評価が厳しすぎる」が多かった。また理系では④「基準や方法が不公正」の回答が多くなる。上述したように相対評価に対する関心が理系の学生の方により強く表れている。コース分けや配属などで成績評価が用いられることが理系では多いため、より合理的な成績評価を求めるものと推測される。

Q.34 Q.33 で選んだもののうち、最も重要なもの1つを選択してください。

①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる ③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない ④成績評価の基準や方法が不公正である ⑤その他

<図33>



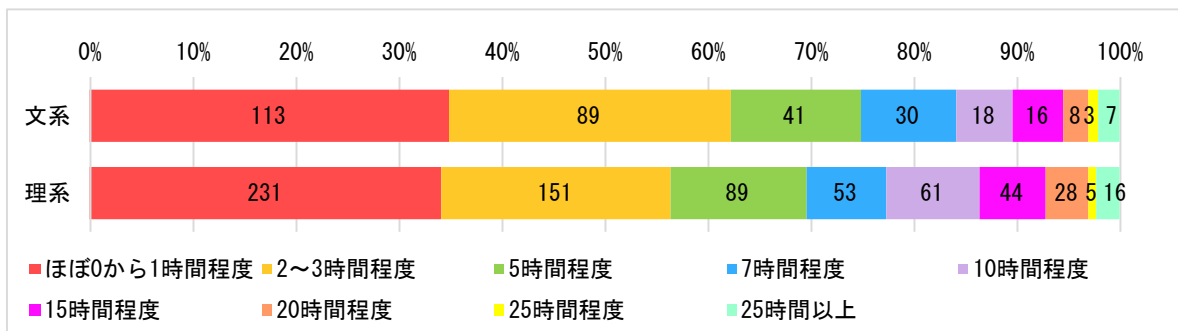
納得できない理由の最重要項目として選ばれた項目がこの図である。回答数が少ないため変動が大きく、信頼性に欠けるが、先の複数回答と同じく、単一回答においても③「基準や方法が不明確」や④「基準や方法が不公正」の成績評価についての理由が過半数となり、次に①の「成績評価が厳しすぎる」が多くなった。

9. 学生生活

Q.35 平均して1週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。

- ①ほぼ0から1時間程度 ②2～3時間程度 ③5時間程度 ④7時間程度 ⑤10時間程度
⑥15時間程度 ⑦20時間程度 ⑧25時間程度 ⑨25時間以上

<図34>

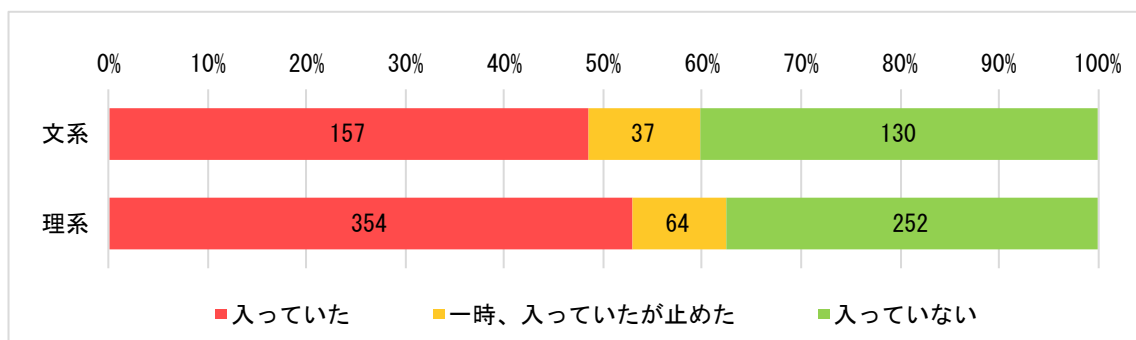


この質問では、1週間に運動する時間を尋ねた。結果を図34に示したが、全体として昨年とほぼ同じ結果である。文系、理系を問わず30～40%の学生は0～1時間/週程度とほとんど運動をしていない。Q.22の回答から明らかのように、正課のスポーツ実習を履修していない学生が約70%であること、さらに彼らが18～19才という年齢を考えるとあまりに運動量が少ないことに驚く結果である。約20～25%の学生は週2～3時間、つまり一日に20分程度の運動をしている。週7時間以上の学生はおそらく体育系のサークルやクラブに入っている学生と思われるが、その比率は20～30%である。

Q.36 あなたは、1回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。

- ①入っていた ②一時、入っていたが止めた ③入っていない

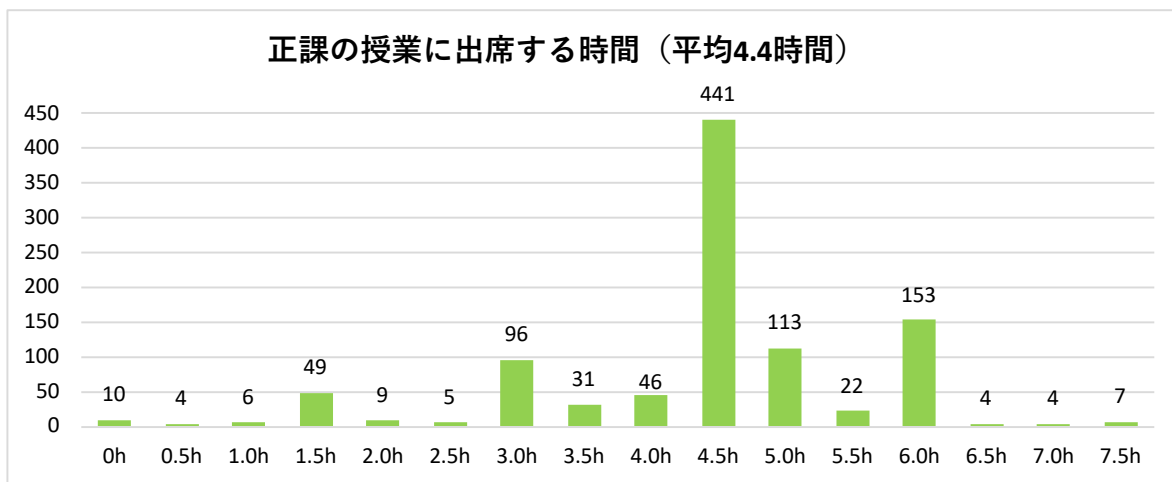
<図35>



Q.37 授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.37～Q.43の活動時間を教えてください。なお、活動時間の項目は、＜正課の授業出席時間＞＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞＜通学時間＞＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞＜アルバイトの時間＞＜週末(土日)での予習・復習・レポート作成等の時間＞です。

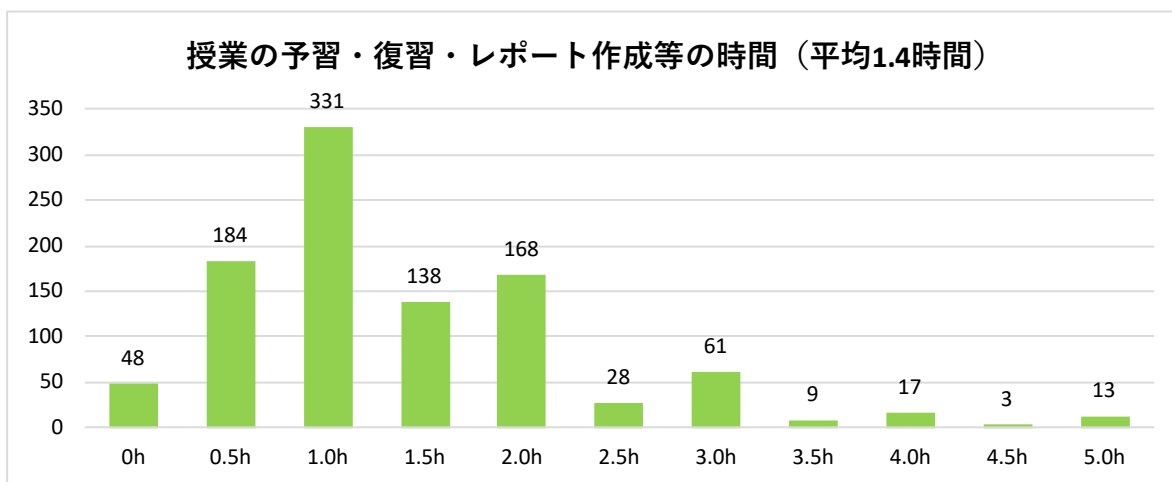
＜正課の授業に出席する時間＞（1コマの授業は1.5時間です）

<図36>



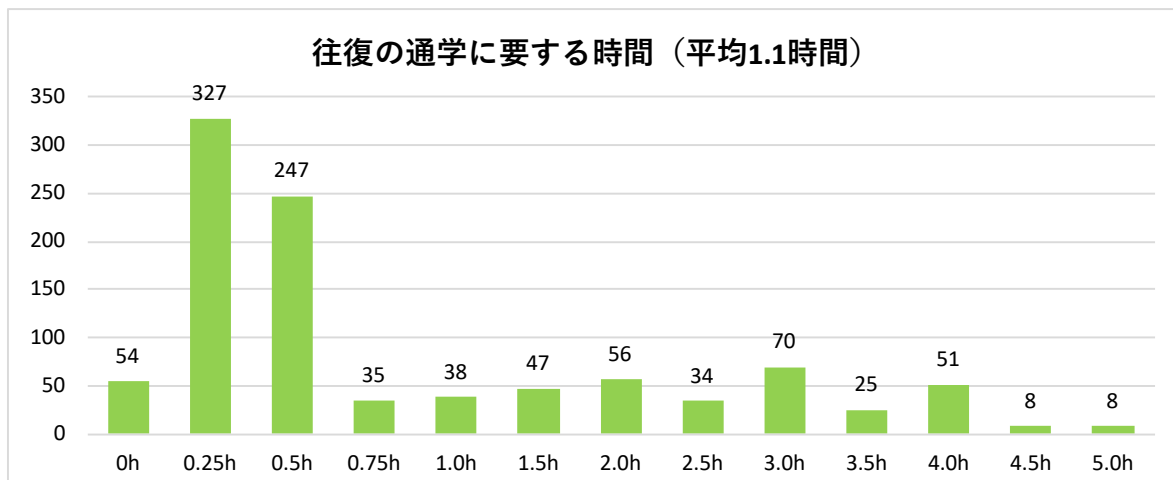
Q.38 ＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞

<図37>



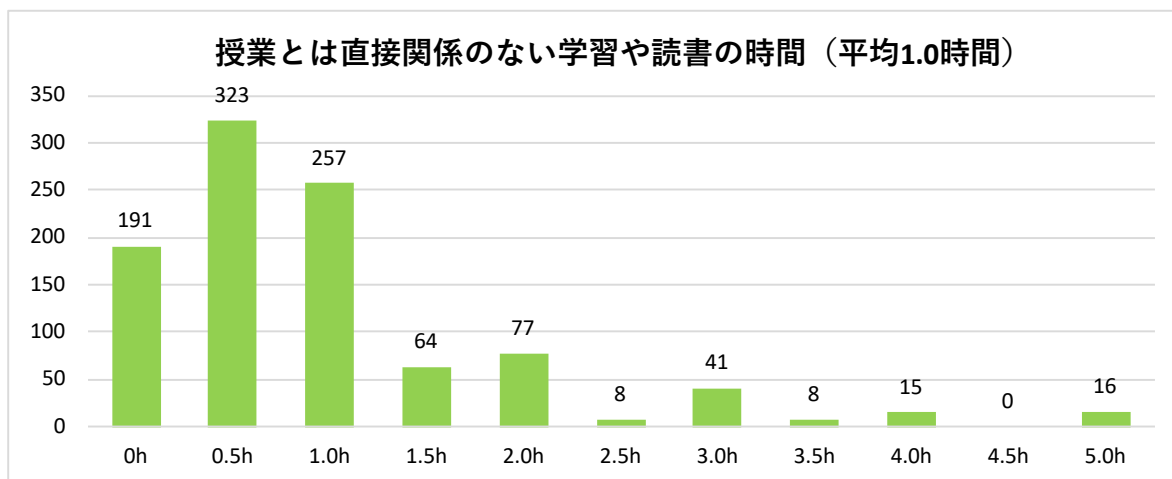
Q.39 <往復の通学に要する時間>

<図38>



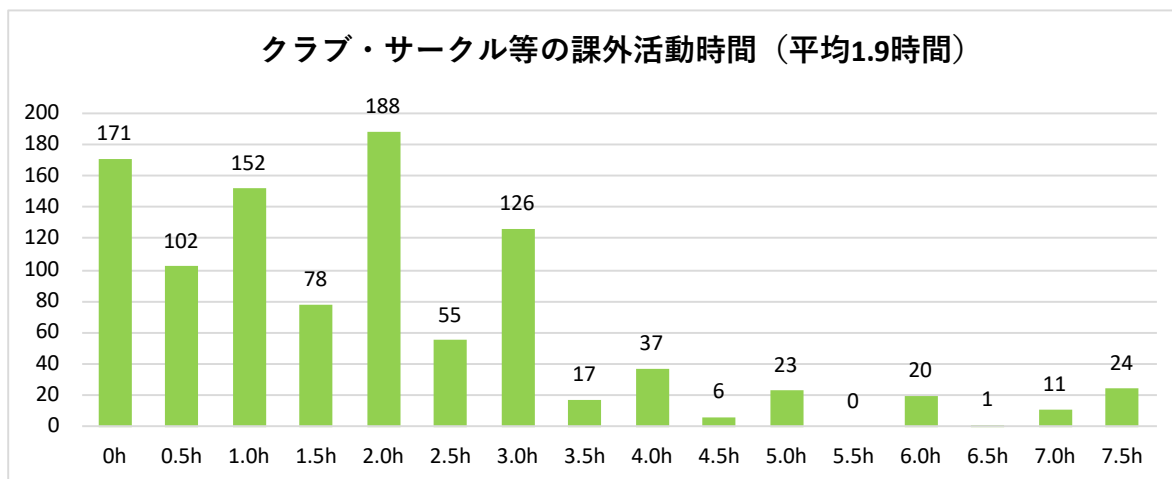
Q.40 <授業とは直接関係のない学習や読書の時間>

<図39>



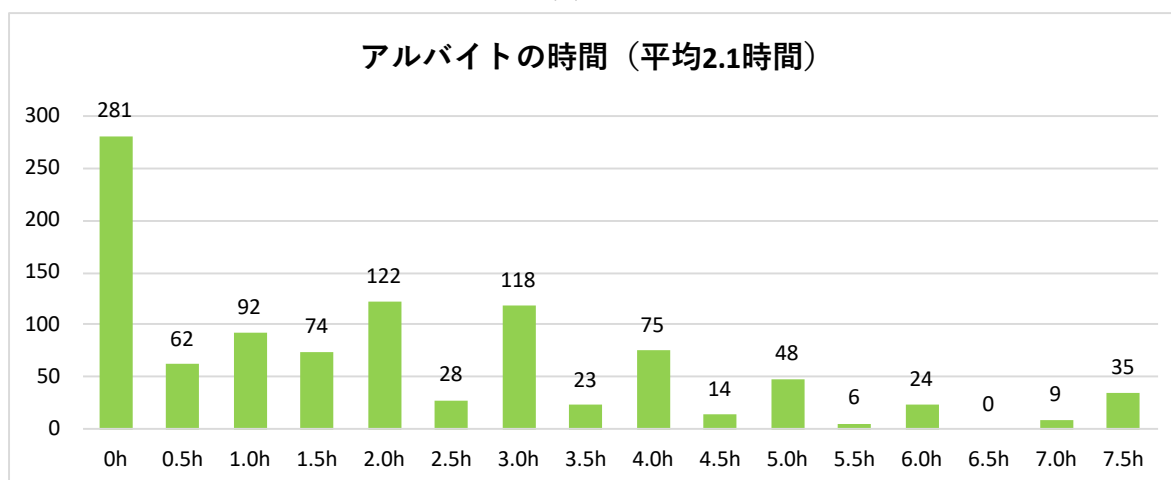
Q.41 <クラブ・サークル等の課外活動時間>

<図40>



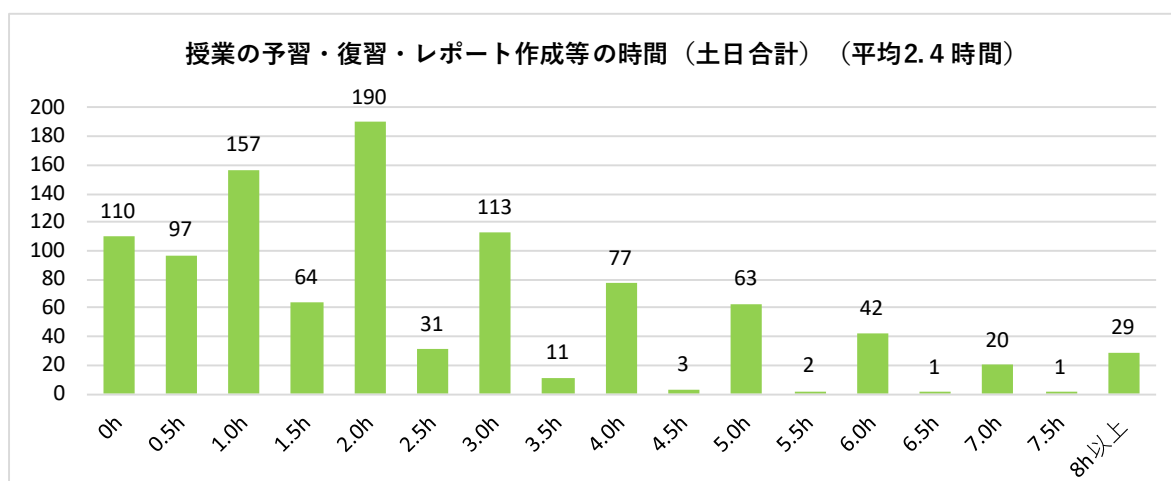
Q.42 <アルバイトの時間>

<図 4 1 >



Q.43 授業期間中のあなたの平均的な週末（土曜・日曜）において、授業の予習・復習・レポート作成等に費やす時間があれば、土曜・日曜の合計時間を教えてください。

<図 4 2 >



1 回生がどのように生活時間を配分しているか、学生生活の実態と学習行動との関連を Q.37~Q.43 の 7 項目の質問により調べた。今年から回答区分に 0h を加えたこと、また質問により区分幅を変化させたことで、より正確な時間分布を得ることができた。

各項目について生活時間の人数分布を図 36~42 に記載している。また、表 4 に全体、文系、理系での各項目平均値を示した。

以前の調査では、1 週間当たりの活動時間を尋ね、時間数の記入を求めたところ、不合理な数字が多数入力されたため、信頼性の観点から多くのデータを削除することになった。そこで昨年度からは一定刻みの指定数字を並べたプルダウン方式により回答を求めた。また、質問は学期中の平均的な 1 日（休祝日を除く月曜日～金曜日）での時間配分を尋ねることに変更した。したがって、休日に多いであろう「アルバイト」、「授業とは直接関係のない学習や読書の時間」等については解釈に注意が必要である。

今年から新たに、土日に「授業の予習・復習・レポート作成等の時間」に費やす合計時間を問うことにした。Q.38の「平日における時間外学習時間」では測定できない授業外学習時間が残るため、参考値として週末休日での学習時間を把握することが必要と考えた。以下の図表では、この項目については1日当たりの時間ではないことにご注意いただきたい。

<表4 1回生の学生生活時間/日 ()内は昨年の結果>

R1	正課	予習・復習等	通学	*	クラブ	バイト	**
全体	4.4(4.5)	1.4(1.5)	1.1(1.0)	1.0(1.1)	1.9(1.8)	2.1(2.1)	2.4
文系	4.2(4.3)	1.3(1.5)	1.1(1.0)	1.1(1.3)	2.0(1.9)	2.3(2.3)	2.1
理系	4.5(4.5)	1.4(1.5)	1.1(1.0)	0.9(1.0)	1.9(1.8)	2.0(2.0)	2.6

* 授業とは直接関係のない学習や読書の時間

** 新規項目：週末の予習・復習等（土日の合計であり1日当たりではない）

全体の平均値で見ると、回答選択方法を改善したのにもかかわらず、昨年の結果とほとんど同じ値を再現している。しかし若干ではあるが、勉学に関する項目で0.1h程度減少し、バイトは変わらず、通学時間、クラブの項目や、集計に現れないその他の時間がやや増加しているように見えるのは残念である。

- ・正課授業出席時間の1日4.4時間は、1コマ授業を1.5時間として1日3コマに相当している。図36を見ても、4.5hの回答が突出して多い。1コマを2単位科目として換算すると1日3コマは週15コマ、年60単位となり、Q.23で過半数の学生が60単位以上取得していたことと整合している。文系と理系で比較すると、僅かながら有意の差があり、理系のカリキュラムの方がやや密になっていることを示している。
- ・通学時間については、往復約1時間の通学時間である。文系、理系の学生で差はほとんど見られない。図38の分布を見ると、多くの学生は1時間以内であるが、往復2.5時間以上の長距離通学をしている学生が約20%もいることは、さまざまな企画をする上で留意しておく必要がある。
- ・単位の実質化の議論でも着目され、かつ成績に影響するであろう授業時間外学習時間（授業の予習・復習・レポート作成等の時間）の項目では、昨年より僅かに減って1.4時間となった。昨年は計測できなかった土日の時間外学習時間を加えても、週9.4時間となり週10時間を切る結果となった。大学設置基準は授業時間外学習時間として2単位授業1コマ当たり4時間の時間外学習を規定している。前述の1日3.0コマ授業が現実とすると、12時間（設置基準）が要求されることとなり、1.4時間（現実）とはあまりにも大きな隔たりがある。設置基準が非現実的であるということは容易いが、それにしても時間外学習時間が1コマ授業当たり0.5時間（1.5時間/3.0コマ）程度という現実の値は大学の授業のあり方を再検討する必要を示している。

その他の項目についてみると、

- ・クラブ・サークルにはほとんどの学生が参加しており、ゼロと答えた学生は17%であった。しかし平均1日1.9時間は時間外学習時間よりも多い。図40の分布図を見ると、ゼロを含む2時間以下の

学生が70%であるが、3時間以上が26%、1日4時間以上もクラブ・サークルに費やす学生が12%もいる。

- ・ Q.42 のアルバイトの項目では、学生の回答は2分化しており、平均値にあまり意味はないと考えられる。図41の分布図から分かるように、アルバイトをしていない実質ゼロ時間の学生が多数いる一方、アルバイトをしている学生群は1日当たり2~3時間程度にピークをもつ分布になる。しかし、全体平均値は2.1時間と長くなっている。この原因は、1日4時間と回答した学生が75名、5時間以上では122名もいるためである。全回答者数が1011名の12%にもなる。この中には経済的に困窮してバイトに追われる学生も多くいると思われるが、このような学生生活では勉学との両立は難しいものと思われる。
- ・ 授業とは直接関係のない学習や読書の時間では、文系学生が1.1(1.3)時間、理系が0.9(1.0)時間とかなりの差がある。昨年度の調査でも同様な差があり、さらに全体として文系も理系も減少傾向にある。以前の調査で読書について尋ねたが、その結果から推測すると、理系学生には授業の教科書、参考書以外の読書を全くしない学生が少なからずいるものと思われる。

次に、Q.09「後期開始時の学習意欲」と学生生活との関連性を調べた。

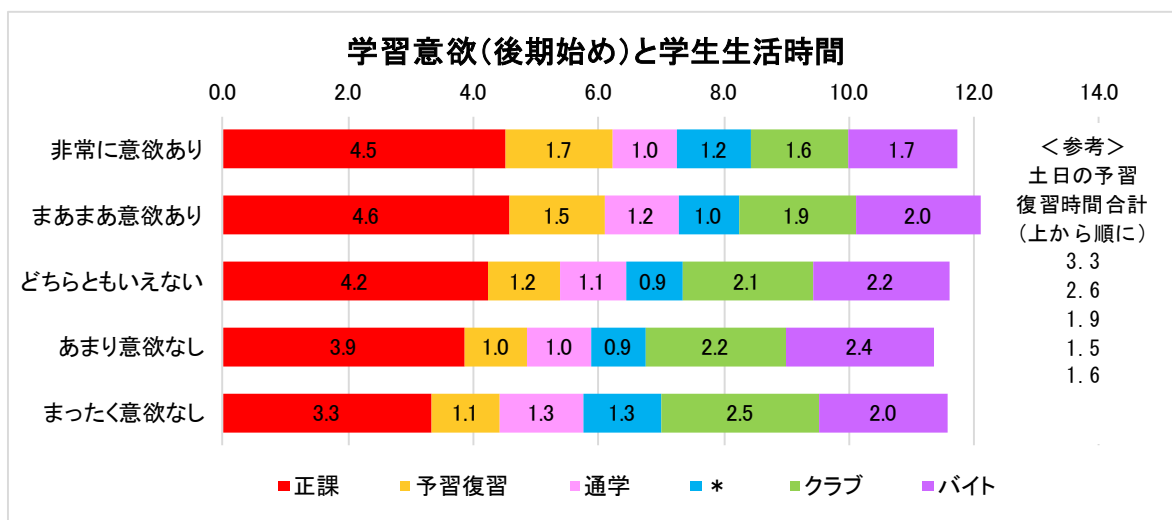
<表5 Q.09 後期開始時の学習意欲と学生生活時間>

	回答数	正課	予習復習	通学	*	クラブ	バイト	**
非常に意欲あり	158	4.5	1.7	1.0	1.2	1.6	1.7	3.3
まあまあ意欲あり	506	4.6	1.5	1.2	1.0	1.9	2.0	2.6
どちらともいえない	204	4.2	1.2	1.1	0.9	2.1	2.2	1.9
あまり意欲なし	116	3.9	1.0	1.0	0.9	2.2	2.4	1.5
まったく意欲なし	23	3.3	1.1	1.3	1.3	2.5	2.0	1.6

* 授業とは直接関係のない学習や読書の時間

** 週末の予習・復習等（土日の合計時間であり1日当たりではない）

<図 4 3 >



後期開始時の学習意欲—生活時間の図表には、正課授業出席時間、授業時間外学習時間（予習・復習・課題等）に明確な傾向が表れている。すなわち学習意欲の高い群ほど、正課授業出席時間、時間外学習時間が長く、その和である全学習時間が伸びている（意欲の低い群から順に 4.4→4.9→5.4→6.1→6.2h）。「非常に意欲あり」から「どちらともいえない」までの中高位群では、全学習時間の差は小さいが、いずれの分類でも下位区分になるとその減少は顕著である。

表 5 には今年から設問に加えた「週末（土日）の授業に関係する時間外学習時間」を記載している。平日 1 日当たりの時間ではなく休日の合計時間であることには注意が必要であるが、学習意欲において、この週末学習の合計時間と顕著な相関がみられる。様々な要素が複雑に作用しているが、上に指摘したように、正課授業出席時間よりは時間外学習時間が学習意欲、学習成績の向上と強く相関していることは明白である。

学生側の意欲に期待するのみならず、予習、復習を含めた学習意欲と行動を喚起する工夫を授業に組入れることが、同じ正課授業時間を使いつつ学習効果を上げる有効な方法と思われ、今後の教育改善の方向性を示唆している。

正課授業出席時間と時間外学習時間を合せた適切な学習時間については議論が必要である。学習時間が長ければ良いというものではない。多数派の中位群で、1 回生がおおよそ平日授業 4.5 時間 + 予習復習 1.5 時間 = 6.0 時間学習の大学生活を送り、かつ年 60 単位以上も取得することについて、やはり疑問を感じる。質問・回答様式を一定にして、生活時間に関するこれらの項目の推移を長期的に観測するべきである。

図 43 で、棒グラフの長さ（調査した活動項目の合計時間 = 約 12 時間）が下位群ほど短くなることも気がかりである。以前のこの調査で、1 日の睡眠時間はどの群でも 7 時間程度と一定であったことから、調査項目になっていない余暇時間が約 5 時間 (= 24 - 12 - 7) であり、余暇時間が下位群ほど長くなることを意味している。この余暇時間には、食事や休憩、友人との交際、運動、TV、ゲーム等、さまざまな生活時間が考えられる。もちろんこれらは健康的な学生生活を送るために必要な時間である。ただ、最近の 1 回生は多数の科目を履修して忙しい毎日を送っているとされているが、その割には学生生活を楽しむ余裕を感じられる。

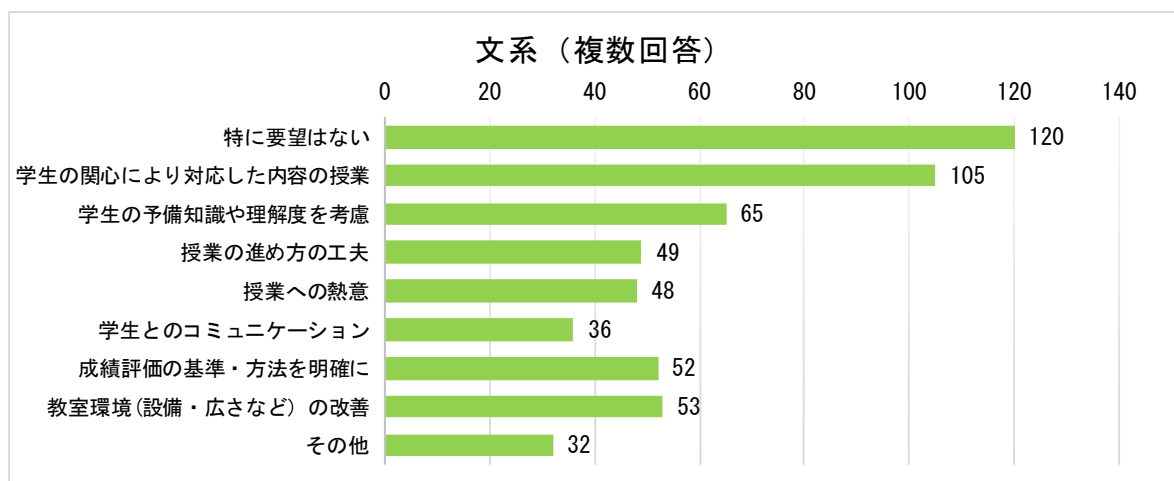
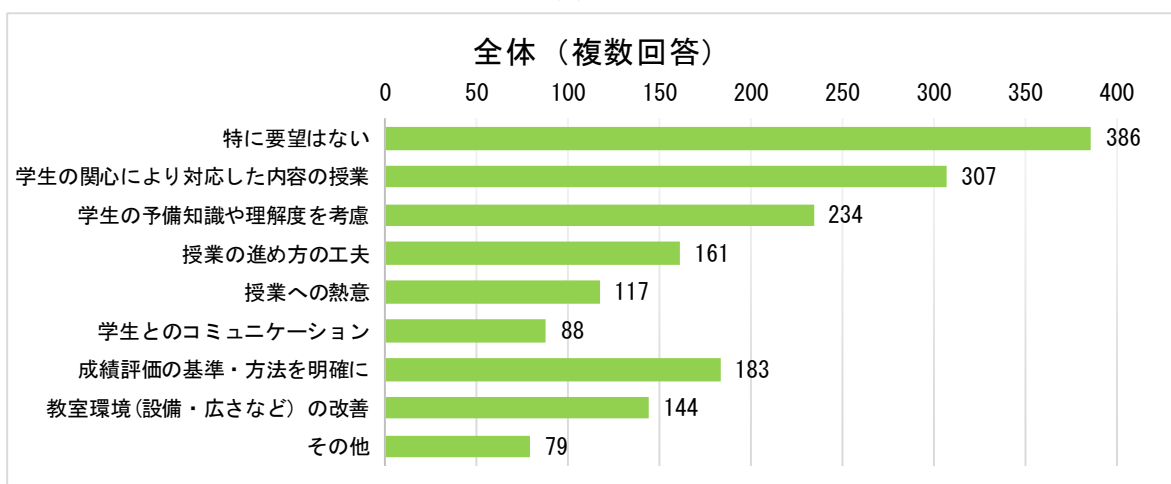
今年度（2019年度）の結果を見ると、「実現された」+「どちらかといえば実現された」という肯定的な意見が約70%になり、昨年の63%より大きく向上した。2016年以降、同様な質問をしているので、図63にはその回答の経年変化を見られるようにしている。例年、理系より文系の方が期待の実現度が7~8ポイント高い傾向であったが、ことしは理系も上昇して文系とほぼ等しくなった。良い傾向ではあるが、70%という数値はまだ向上させる余地が残されていると考えられる。

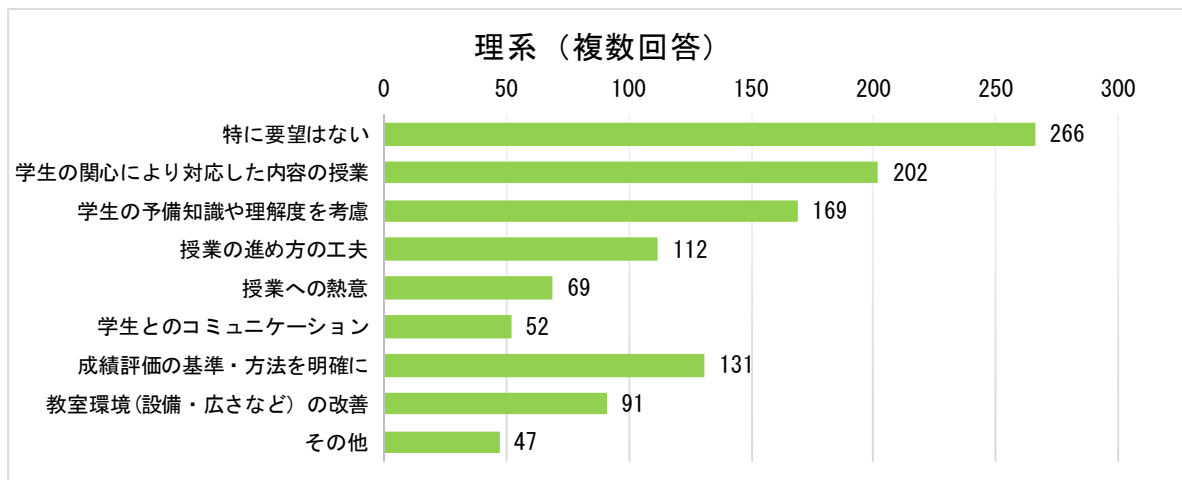
1.1. 教養・共通教育についての意見

Q.45 今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。あてはまるものすべてにチェックをつけてください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
- ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
- ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
- ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
- ⑨その他(記述回答)

<図45>

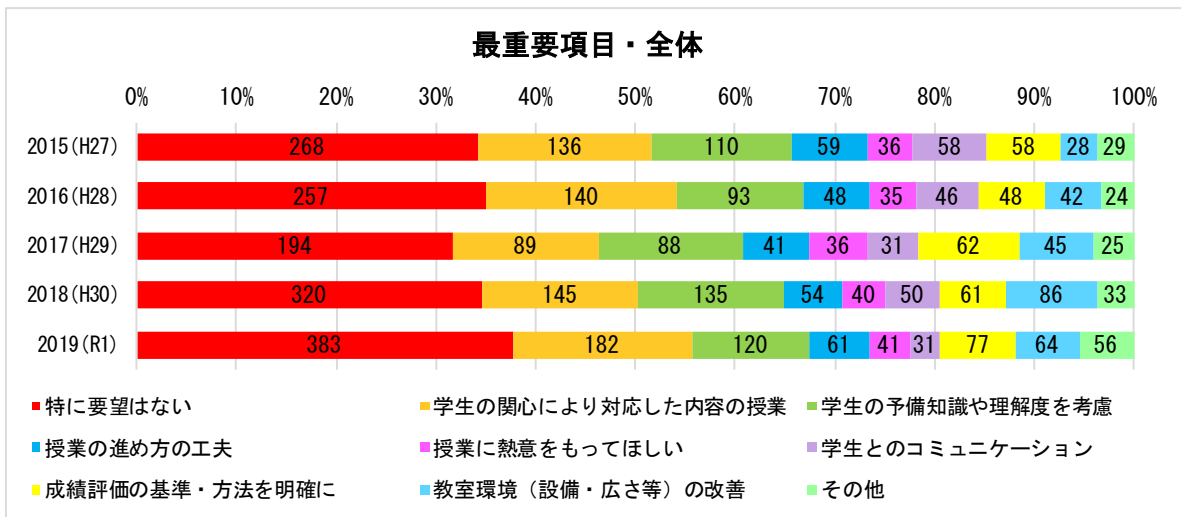


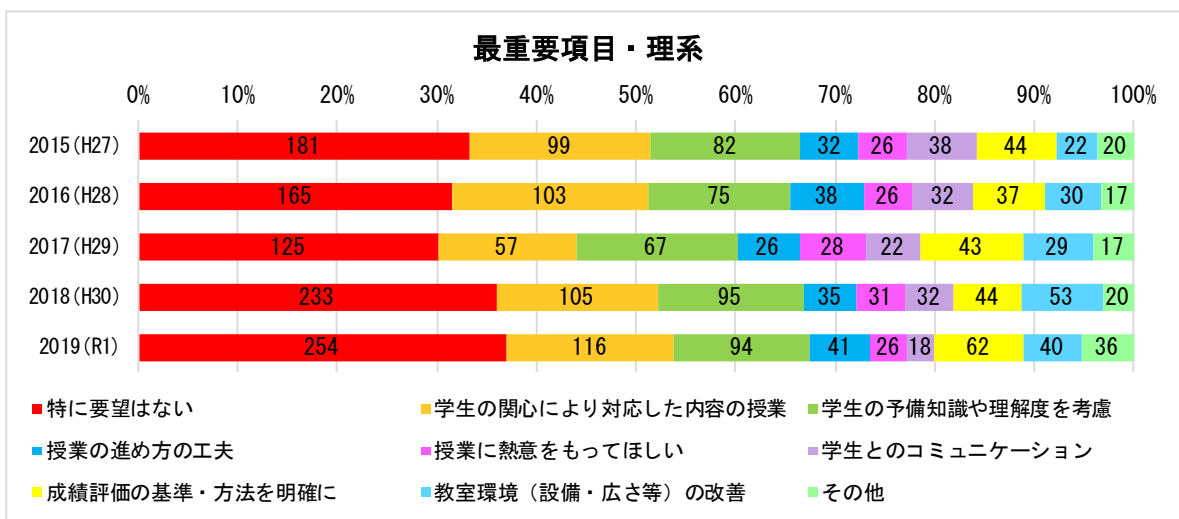
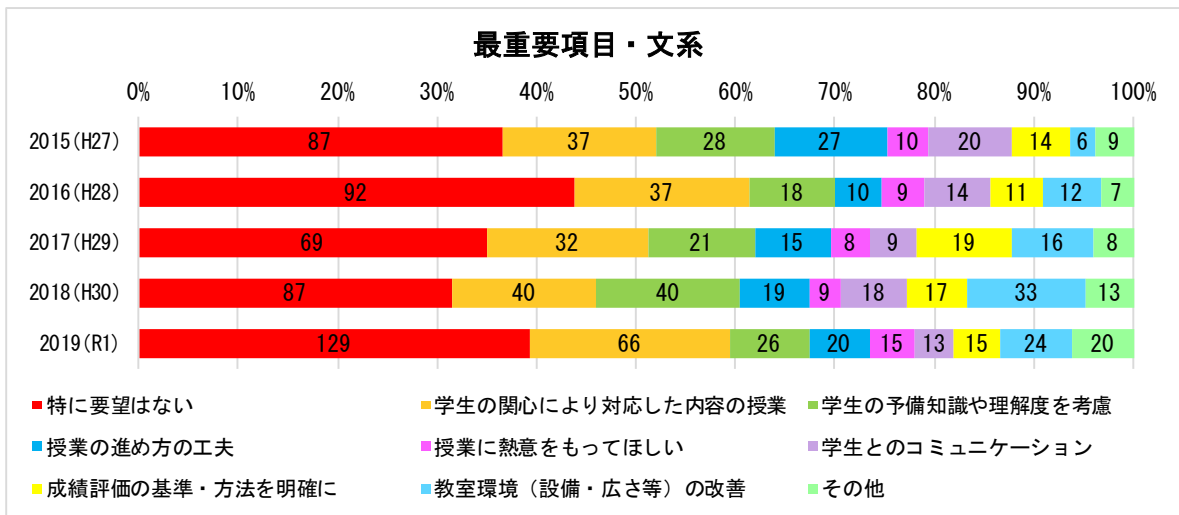


Q.46 Q.45 で選択したもののうち、最も重要なものを選んでください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
 ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
 ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっとしてほしい
 ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境（設備・広さなど）を改善してほしい
 ⑨その他（記述回答）

< 図 4 6 >





この項目についても毎年質問して、経年変化をみている。図 45 は改善要望を複数回答で尋ねた結果の度数分布を示している。全体としては「特にない」の回答数をもっとも多い。理系では「特にない」以外の項目でも 100 名を超える多くの要望があり、学生の関心や理解度に考慮をもとめる要望や、成績評価に関する要望が多い。文系では、昨年と比較して「学生の関心により対応した内容の授業」が多くなった。

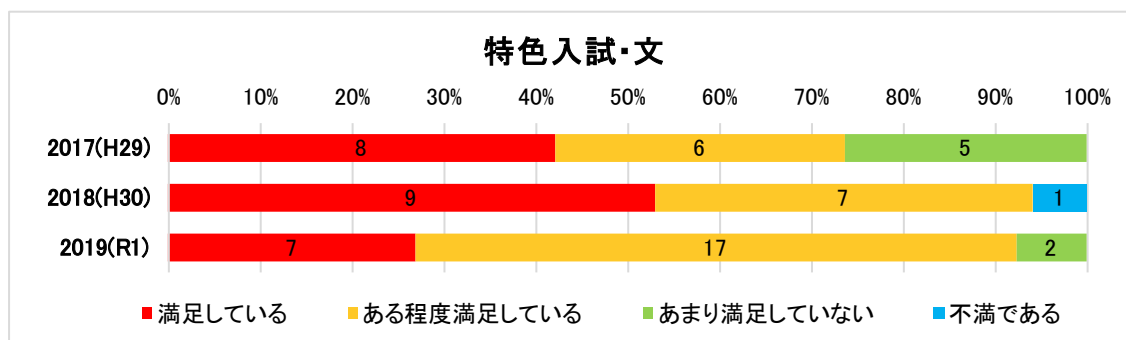
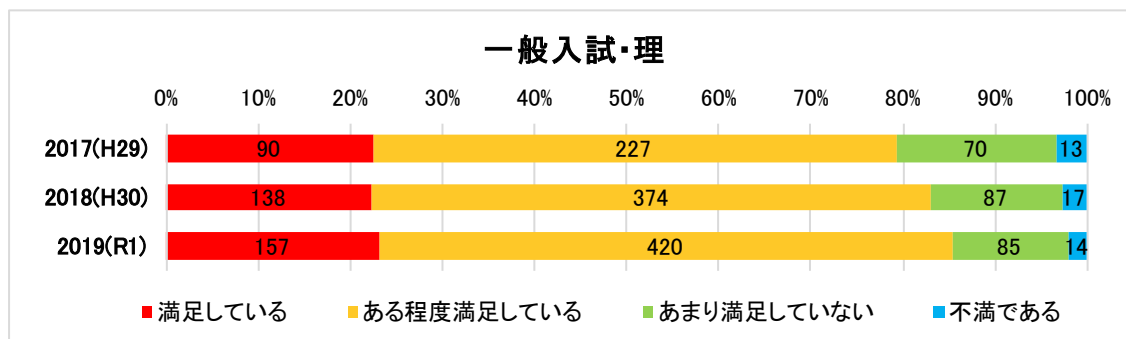
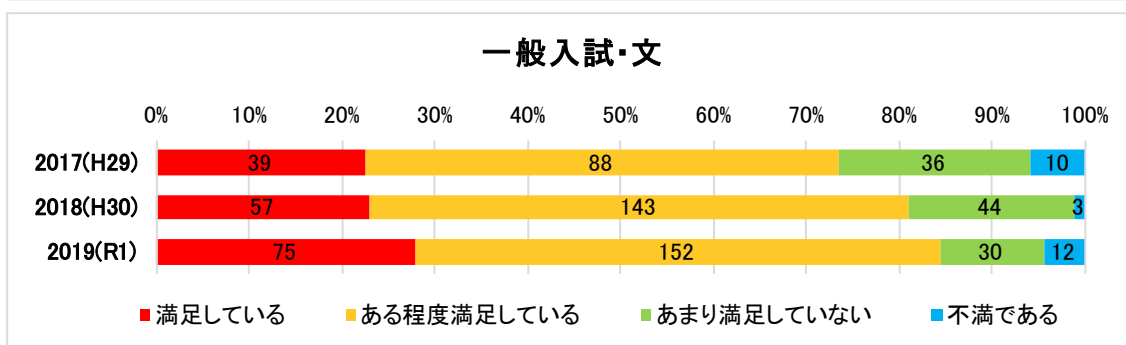
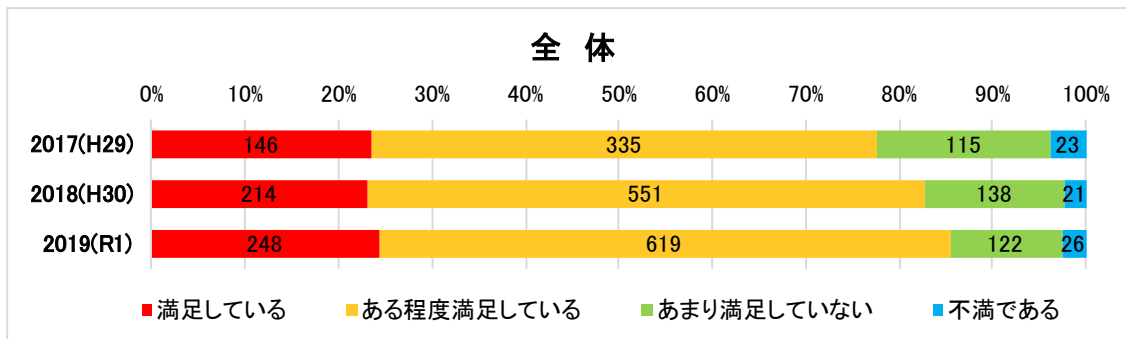
図 46 は、要望の中で最重要な項目と指摘された項目の割合を、2015 年から 5 年間について図示したものである。文系、理系を比較すると、理系では「成績評価の基準・方法を明確に」の要望が増加する傾向が続いている一方、文系では「学生の関心により対応した内容の授業」が増えている。

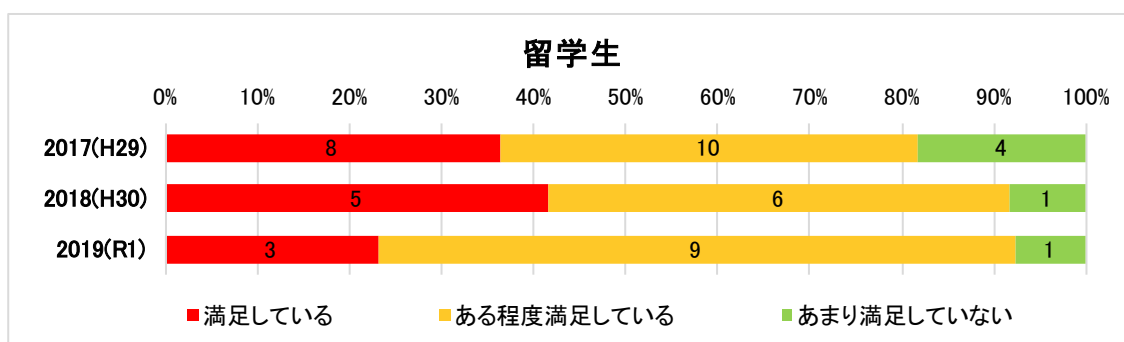
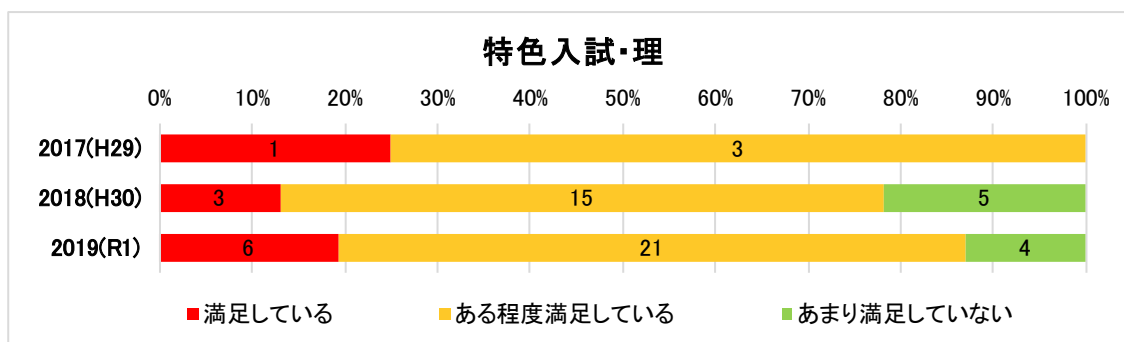
全体をみると、「特に要望はない」が 40% 近くあり、かつ年を追って増えることは良い傾向と言えるが、上述の 3 項目（②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい、③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい、⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい）に対しても多くの学生が最重要項目として要望していることに留意しておかなければならない。

Q.47 この1年間に受けた全学共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。

①満足している ②ある程度満足している ③あまり満足していない ④不満である

<図47>





アンケートの最後に、1回生の1年間に受けた教養・共通教育を振り返っての満足度を尋ねた。図47には、入試区分別に2017年度からの3年間の結果を比較して記載したが、毎年ほとんど同じか、やや肯定的回答が増加する良い傾向を示している。特色入試や留学生の区分では回答数が少なく有意の傾向を把握できないが、一般入試の文系・理系、すべての総計である全体の図を見ると、「満足している」+「ある程度満足している」の肯定的意見は全体で85%（2017:78%→2018:83%）あり、高いレベルにあると言える。

次に、学生の満足度に影響を与える因子を検討するため、他の質問項目との関連を調べて表6に掲載した。この解釈にはいろいろな見方ができるが、3.2以上の高い満足度を与える項目（満足度の全体平均値は3.07）と、関連を調べた各項目で回答①→④（⑤）の高位群→低位群により満足度が明確に減少する項目に着目した。このような観点からすると、「学習意欲」、「専門との一致度」、「成績評価に対する納得度」の3項目では、高位の①で3.2~3.4の高い満足度を示し、かつ下位の群になるに従って、明確に満足度が低下していく。これらの項目の基盤となっているであろう「志望」の項目においても同様の傾向が見られる。また「授業時間外学習時間」ではやや変化は緩慢になるものの明らかな相関がある。一方、「単位数」、「正課授業時間」の項目とは相関が弱いという結果である。

明確な志望に裏打ちされた強い学習意欲が学習行動を伴って満足度に繋がるということは予想できることであるが、「成績評価に対する納得度」も学生が満足感を得るために強い効果をもつことが認められた。

前章で述べたように、学生の意識としては2回生進級時の「期待実現度」や「満足度」が記憶に残り、卒業時アンケートにおける全学共通教育での向上感、ひいては大学生活を通じての全学共通教育に対する最終評価に繋がるものと思われる。

満足度 = 4 x ①満足している + 3 x ②ある程度満足している + 2 x ③あまり満足していない
+ ④不満である

<表 6 >

	志望 Q.04	一致度 Q.06	意欲 Q.09	単位 Q.23	納得度 Q.32	正課授業 Q.37	授業外学習 Q.38
①	3.24	3.28	3.44	3.18	3.27	3.20	3.22
②	3.19	3.05	3.14	3.10	3.03	3.16	3.16
③	3.04	2.96	2.99	3.15	2.68	3.13	3.16
④	2.85	2.66	2.81	3.08	2.82	2.96	3.11
⑤			2.39	3.09		2.94	2.94

注) 満足度の平均値は 3.06、表中①～④ (⑤) の回答群の意味は以下に記載の通り

Q.04 志望 (現在) (①: はっきり決めている、②: だまかには決めている、③: いくつかあったが、どれとは決めていない、④: あまり決めていない)

Q.06 一致度 (現在) (①: よく一致している、②: まあ一致している、③: どちらかという一致していない、④: あまり一致していない)

Q.09 意欲 (後期開始時) (①: 非常に意欲あり、②: まあまあ意欲あり、③: どちらともいえない、④: あまり意欲なし、⑤: まったく意欲なし)

Q.23 単位数 (①: 単位 ≧ 65、②: 65 > 単位 ≧ 60、③: 60 > 単位 ≧ 55、④: 55 > 単位 ≧ 50、⑤: 50 > 単位 ≧ 40)

Q.32 成績納得度 (①: 納得している、②: どちらかといえば納得している、③: どちらかといえば納得できない、④: 納得できない)

Q.37 正課授業時間 (①: 6.0h 以上、②: 5.0～5.5h、③: 4.5h、④: 3.0～4.0h、⑤: 2.5h 以下)

Q.38 授業時間外学習時間 (①: 3.0h 以上、②: 2.0～2.5h、③: 1.5h、④: 1h、⑤: 0.5h 以下)

12. まとめ

2回生進級時アンケートは、入学後1年間の大学生活を経て、学生諸君がどのような学習を行い、どのような意識をもっているかを把握して、教養・共通教育の改善に役立てることを目的としている。従来のアンケートの一部を継承して経年変化の追跡を可能にしながら、入試種別、学部別の解析群を設定し、全学、文系、理系の括りの他、必要に応じてより細かな解析区分を採用することにより、結果をもたらした要因についての手がかりを得る形式にしている。また、アンケートの解析においても、教育改善のためのデータを得るという観点を強く意識した。

本年度の結果は、多くの点で昨年と同様の傾向を示しているが、学生の学習動向や生活実態には大きな慣性があり、年により大きく変化することはない。しかし、変化の傾向を把握することは今後を予測するために重要であり、それにも増して、慣性の中にある教育的な問題点を把握し、改善のきっかけを掴むことが重要である。

アンケートの設問をする段階で想定していたように、

志望意識 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習成果 → 向上感（満足度）

のスキームは、今回の結果を見ても確かに成立している。教育効果の向上を図るためにはこの正しい流れを維持し拡大する施策を行うとともに、問題点を早期に把握して負のスキームになる芽を摘み取る努力がもとめられる。本年度のアンケート結果からは、次のような点を指摘できる。昨年度と共通の点が多数あるが、今年度の特徴も加えて以下に列举する。

- ・入学時、将来活躍したい分野（志望）についての学生意識は学部により大きな差があるが、入学後のさまざまな経験から次第に自身の将来像が明確になる傾向が見られる。それに伴い志望意識と専門との一致度も次第に改善している。しかしながら入学後の学習意欲の低下は相変わらず深刻である。今回も、学部により低下度の差が見いだされたことから、各学部で教育体系、カリキュラムの再点検をされるとともに、将来に向けたキャリアパスや学習の動機付けとなる情報を、入学前のみならず入学後にも学生対して積極的に提供されることが必要である。
- ・特に新入生にとって、生活環境の激変や大学での学び方、1回生前期のカリキュラム、各学部での履修指導ガイダンスは、学習意欲に強い影響を与えていることが推測される。今年の調査では多くの学部で2回生進級時の学習意欲に回復がみられたことは好ましい傾向である。各学部で進級時ガイダンスに力を入れていただいた効果と推察している。
- ・外国人教員による英語授業、E科目の設定等、英語教育の改革が進められているにも関わらず、英語能力に向上感をもてない学生が多い。現状からもう一步踏み込み、向上感をもてる英語学習を実現するための努力がもとめられる。ただし、今年の調査では、文系、理系とも向上感が増加する傾向が見られた。英語教育の改善を進めながら、学生諸君の意識変化を注視していきたい。
- ・ILASセミナーは例年高い評価を得ている。すでに、全学の教員の協力を得て、260科目以上が提供されているが、今後はより新入生に魅力あるテーマを設定する一方で、履修状況に応じた定員の増加等、抽選に外れて受講できない学生を少なくする対策を講じることが、75%程度で高止まりしている受講許可率を上げることに効果的と思われる。
- ・取得単位数の質問を70単位以上まで拡大した結果、1回生単位取得の全体像が明らかにできた。その

結果、文系・理系とも過半数の学生が1回生で60単位以上を取得しており、学部格差も著しい。この状況は明らかに過剰履修であり、卒業単位数、標準修業年数からみても異常状態にある。カリキュラム、履修指導、要卒単位の再検討や、来年度から改訂予定のCAP制の実施状況を検証し、速やかに改善策を講じる必要がある。特に、平成31年度実施の機関別認証評価において、「履修登録科目に関する単位の上限の設定（CAP制）等について、適切であるか」が問われていることから、早急な是正が求められる。

- ・成績評価について、評価基準の透明性、公平性をもとめる声が、特に理系学生で大きくなっている。成績評価の方法を明示し、科目間・クラス間の不公平感を改善することが求められる。これはGPA制度の導入が教育改革に資するとされた主要な論点の一つであることを改めて認識するべきである。
- ・1回生で運動時間が不足している学生が多く、健康管理について新入生ガイダンス等でより強くアピールすることが必要である。また、本学の環境や運動施設は貧弱と言わざるを得ない。一般学生が手軽に運動を楽しめる環境の整備が望まれる。
- ・かねてから言われているように、授業外学習時間が明らかに不足している。授業科目数や取得単位数を増加させることよりも、自ら学ぶ姿勢を喚起する授業を推進することが、教育の量から質への転換を促し、教育効果を上げる道筋になると思われる。
- ・教養・共通教育への満足度は、「学習意欲」と「成績」のみならず、「成績評価への納得度（信頼性）」から形成される。教育改善の議論においては、この点にも注意を払うべきである。
- ・Q.48で述べられた改善要望において、履修登録、定員制限と抽選についての意見が多数寄せられた。教育効果を考えるとクラスサイズが過大にならないように一定の定員を設けることは避けられないが、不満を招く一つの大きな要因は、いわゆる楽勝科目という風評により履修者が一部科目に殺到し、本当にその科目を受講したい学生が履修できないという事態にある。各授業の到達目標の設定と成績評価の在り方、授業外学習の組み入れ等、教育システムとしての問題点を全教員が共有し、共通の認識の下に改善に取り組むことが要望されている。また、学生諸君に対して施策の意図を伝えて理解を得る努力が求められる。

第5章 大学教育での向上感 において設けた Q.12~Q.17 の質問は、各学部におけるカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに関連する内容である。2回生進級時アンケートは、入学後の一つの通過点でのモニターという位置づけにある。2017年度卒業生より、卒業生進路調査アンケートにおいて「全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べてどの程度向上したと又は得られたと思いますか？」との質問を加えていただいたので、大学教育4年間の総括としての学生意識を調査することができるようになった。その結果を「5. 大学教育での向上感」に記載している。そこで示したように、「専門以外の幅広い知識と教養」や「専門分野で基礎となる学力」の向上感に対する肯定的回答率に着目すると、卒業時において80%を超える学部が大半であった。この2回生進級時アンケート「Q.44 全学共通科目に対する期待の実現度」では約70%、また Q.47「満足度」においても80%以上の肯定的意見が得られ、かつここ数年増加傾向にあることは喜ばしい結果である。このように、2回生進級時における教養・共通教育に対する満足度が卒業時においても保持され、大学生活全体を通じた印象、評価に繋がることが示唆されている。このことに留意して、継続した改善努力が求められる。

今後は、本アンケートで示唆された重要項目について、教務データ等のより正確な資料をもとに検証した上で、アンケートの指摘が事実であれば具体的な対策を講じられるように切に願うものである。また、アンケート調査の欠点を改善し、さらに回答率を上げる方策を考えながら継続して実施していきたい。今年度は学部の進級時ガイダンスにて本アンケートに協力をお願いした。また学部とともに教育院関係者にもご努力をいただいた結果、回答率を改善することができた。これらのご協力を改めて感謝したい。

最後に、長文のアンケートに耐えて回答し貴重なデータを提供していただいた学生諸君に厚く御礼を申し上げます。また、膨大なデータを的確に、工夫を凝らして解析していただき国際高等教育院事務部の皆様に感謝を申し上げます。

平成 31 (2019) 年度 2 回生進級時アンケート (平成 30 (2018) 年度入学生)

(実施期間 : 2019/04/01 - 2019/06/04)

・実施要項 (PDF ファイルにて表示、以下内容)

- * 本アンケートは記名式で行います。
- * 有効回答のなかから抽選で粗品を進呈いたします。
- * 回答結果は、個人が特定できる形での公表はしません。
- * なお、学生番号と氏名は大学から当選者への連絡・確認に使用します。
- * 本調査は、入学後 1 年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について 2 回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実するための基礎資料にすることを目的としています。
- * あなたの昨年度 1 年間を振り返って回答してください。

Q.01 あなたが京都大学に入学した入試区分を選択してください。

- ①一般入試 (文系) ②一般入試 (理系) ③特色入試 (文系) ④特色入試 (理系)
⑤外国人留学生特別選抜

Q.02 あなたの学部を教えてください。

- ①総合人間学部 ②文学部 ③教育学部 ④法学部 ⑤経済学部 ⑥理学部 ⑦医学部 (医学科)
⑧医学部 (人間健康科学科) ⑨薬学部 ⑩工学部 ⑪農学部

Q.03 あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野 (希望分野) を決めていましたか。

- ①はっきり決めていた ②大まかには決めていた ③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
④あまり決めていなかった

Q.04 今現在、自分が将来活躍したい分野 (希望分野) を決めていますか。

- ①はっきり決めている ②大まかには決めている ③いくつかあるが、どれとは決めていない
④あまり決めていない

Q.05 入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。

- ①変わっていない ②変わった

Q.06 現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。

- ①よく一致している ②まあ一致している ③どちらかという一致していない
④あまり一致していない

Q.07 入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の 5 つから選択してください。なお、この質問は Q.7~Q.11 (入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在) まであります。

<入学当初の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし

⑤まったく意欲なし

Q.08<前期半ばの時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.09<後期開始の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.10<後期半ばの時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11<現在>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.12 入学後1年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.13 1年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.14 あなたの専門分野で基礎となる学力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.15 1年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.16 1年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.17 1年間で、あなたの英語の能力（英語以外の言語を第1外国語とした方は、その言語の能力）はどの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.18 1回生でILASセミナーを履修しましたか。

- ①履修した ②予備登録をしたが履修しなかった ③予備登録をしなかった

Q.19 Q.18で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。

- ①とても満足している ②どちらかという満足している ③どちらかという満足していない
④満足していない

Q.20 Q.18で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。

- ①抽選に外れてしまった ②希望順位の低い科目だったのでやめた ③履修できない曜日・時限だった
④何度か授業に出たが興味をもてなかった ⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
⑥その他（記述回答）

備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.21 Q.18で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。

- ①履修したいと思わなかった ②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
③予備登録に間に合わなかった、または忘れた ④忙しくて履修できそうになかった
⑤その他（記述回答）

備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.22 スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習 I・II・III、地球科学実験のうち、1回生で履修した科目にチェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。

- スポーツ実習 IA スポーツ実習 IB 物理学実験 基礎化学実験 生物学実習 I
生物学実習 II 生物学実習 III 地球科学実験

Q.23 あなたは1回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。

- ①単位 \geq 70 ②70>単位 \geq 65 ③65>単位 \geq 60 ④60>単位 \geq 55 ⑤55>単位 \geq 50
⑥50>単位 \geq 45 ⑦45>単位 \geq 40 ⑧40>単位 \geq 35 ⑨35>単位 \geq 30 ⑩30>単位 \geq 25 ⑪25>単位

Q.24 Q.23について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20
⑥20>単位 \geq 15 ⑦15>単位

Q.25 Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20
⑥20>単位 \geq 15 ⑦15>単位

Q.26 1 回生の間に単位を取得した「人文・社会科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.27 1 回生の間に単位を取得した「自然科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.28 1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の英語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.29 1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の初修外国語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.30 あなたの 1 回生（前期＋後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1 回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください。

- ①GPA \geq 4.0 ②4.0>GPA \geq 3.5 ③3.5>GPA \geq 3.0 ④3.0>GPA \geq 2.5 ⑤2.5>GPA \geq 2.0
⑥2.0>GPA \geq 1.5 ⑦1.5>GPA

Q.31 あなたが 1 回生後期（2018 年 12 月）に受けた TOEFL-ITP のスコアはどのレベルでしたか。

- ①スコア \geq 550 ②547 \geq スコア \geq 503 ③500 \geq スコア \geq 450 ④447 \geq スコア

Q.32 1 回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします：全体として自分の成績評価に納得していますか。

- ①納得している ②どちらかといえば納得している ③どちらかといえば納得できない
④納得できない

Q.33 Q.32 で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものにチェックをつけてください。

- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる
③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった

④成績評価の基準や方法が不公正である ⑤その他（記述回答）

備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.34 Q.33 で選んだもののうち、最も重要なもの 1 つを選択してください。

- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる
③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった
④成績評価の基準や方法が不公正である ⑤その他

Q.35 平均して 1 週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。

- ①ほぼ 0 から 1 時間程度 ②2～3 時間程度 ③5 時間程度 ④7 時間程度 ⑤10 時間程度
⑥15 時間程度 ⑦20 時間程度 ⑧25 時間程度 ⑨25 時間以上

Q.36 あなたは、1 回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。

- ①入っていた ②一時、入っていたが止めた ③入っていない

授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.36～Q.41 の活動時間を教えてください。なお、活動時間の項目は、＜正課の授業出席時間＞＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞＜通学時間＞＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞＜アルバイトの時間＞ です。

Q.37 <正課の授業に出席する時間>（1 コマの授業は 1.5 時間です）

Q.38 <授業の予習・復習・レポート作成等の時間>

Q.39 <往復の通学に要する時間>

Q.40 <授業とは直接関係のない学習や読書の時間>

Q.41 <クラブ・サークル等の課外活動時間>

Q.42 <アルバイトの時間>

Q.43 授業期間中のあなたの平均的な週末（土曜・日曜）において、授業の予習・復習・レポート作成等に費やす時間があれば、土曜・日曜の合計時間を答えてください。

Q.44 全体として、あなたが全学共通科目に対して抱いていた期待は実現されましたか。

- ①実現された ②どちらかといえば実現された。
③どちらかといえば実現されなかった。 ④実現されなかった。

Q.45 今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。あてはまるものすべてにチェックをつけてください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
- ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
- ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
- ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
- ⑨その他(記述回答)

備考：その他(記述回答) 上限 20 文字まで。

Q.46 Q.45 で選択したもののうち、最も重要なものを選んでください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
- ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
- ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
- ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
- ⑨その他

Q.47 この1年間に受けた教養・共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。

- ①満足している ②ある程度満足している ③あまり満足していない ④不満である

Q.48 最後に、今後の教養・共通教育の改善点や要望があれば、要点を簡潔に記入してください。良かったこと、感動したこと、印象等でも結構です(自由記述・500文字制限)。

備考：質問はここまでです。ご協力ありがとうございました。



2019（令和元）年度2回生進級時アンケート報告書

令和元年10月 発行

編集 京都大学国際高等教育院

発行 京都大学国際高等教育院

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

Tel 075-753-6690/6513
